

鎮守府の夏、秋の夕暮れ

レクス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

8月、南方海域強襲偵察作戦において激戦の末、数多の艦娘達が南海に散っていった。

それから3ヶ月。再度南方海域への大規模作戦が発動した頃、かつての大規模作戦で沈んでいた艦娘達は意識を取り戻し、提督の下への帰還を目指す。

見覚えのある風景、見覚えのある仲間達。されど、仲間達はこちらに砲を向ける。帰還を目指す彼女達が、悲痛な声を上げ応戦した。「ソレデモ、提督ノトコロニ帰りタイ……」

目次

鎮守府の夏	1
秋の夕暮れ	20
エピローグAルート	54
暁の水平線を越えて	
エピローグBルート	60
沈む鎮守府	

鎮守府の夏

* 前編 “鎮守府の夏”

*

8月19日。その日、佐世保鎮守府には雨が降り注いでいた。鎮守府の入り口を立つ衛兵にパスカードを見せ、その門を潜った。鎮守府の敷地内に入っていく軍服姿の男性と、それにつきそう3人の少女。

3人とも蒼い髪飾りを付けており、そこには“佐00689”と刻印されている。これは鎮守府から艦娘1人1人に支給される物であり、これでどの提督の艦娘か識別を行っている。

少女のうち1人は持っていた雨傘を転んで折ってしまっており、それに巻き込まれて転んだ別の少女と同じ傘に入っている。

もう1人、物静かな雰囲気の少女は2人から一步引き、男性のすぐ隣を歩いていった。

階級章を見る限り、この男性の階級は少将だ。階級の割には年若く、20代後半に見える。

尤も、艦娘を運用する提督には独自の階級システムが適用されているというだけで、元帥クラスがゴロゴロいる中で少将といえば中の上程度であろうか。

「提督、今日はありがとうございます」

「いや、いいんだ。本当なら1週間後、小田原の方に行った方がいいんだけど……な」

「ここからじゃ遠いですしね」

4人は、東山海軍墓地からの帰りだった。何十年も前のこの日から1週間後、駆逐艦“五月雨”は潜水艦の雷撃を受け戦没した。

五月雨の慰霊碑は軍服姿の男性が言うように、神奈川の小田原に建てられている。しかし佐世保からは遠い。

そこで代わりに向かったのが、五月雨が白露、時雨と共に所属していた第27駆逐隊の慰霊碑であった。

とはいえ、「夕立」「村雨」の戦没後に僚艦「春雨」と途中編入してきた五月雨の名前は、この碑にはないし、何より戦没日は1週間後である。

他に同じことを考えた者はいなかったようで、雨が降る東山海軍墓地に人影はなかった。

「五月雨！ 濡れちゃったしお風呂に入る！ 私がいつちばーん！」
「あ！ ……それでは提督、これから頑張りますね！」

「五月雨」と呼ばれた少女が、先に走っていった少女を追いかけ、雨の向こうへと消えていく。

「僕からお礼を言うよ。 提督、今日はわざわざ五月雨の為にありがとう」

「気にする必要はないさ。 今日のはたまたま時間が空いてて、五月雨が目に留まったからな。 夕立と村雨も連れていった方がよかったのかも知れんが、遠征に出してたのが残念だ」

「そうなんだ。 僕はてつきり、これからは全員分行くのかと思ったよ」

「それは厳しいな」

傘を閉じ、物静かな雰囲気少女が微笑む。 雨の勢いは先程より大分弱まっていた。 もうすぐ雨は上がるだろう。

「ただいま、蒼龍。 第2艦隊はもう戻ったか？」

「提督、おかえりなさい。 隣の提督さんが来てますよ。 第2艦隊は提督が出かける前に作戦成功の連絡があつてから、まだ帰ってないですね。 帰投予定まで後10分くらいです」

「じゃあ、提督。 僕は出撃まで待機しておくよ」

佐世保鎮守府の一角、彼に与えられた応接間を兼ねた執務室。

そこで出迎えてくれたのは緑の着物を着こなす秘書艦の「蒼龍」。
彼女は、近年その存在が確認された海の怪物、「深海棲艦」に対抗すべく生み出された「艦娘」。 その中で「正規空母」に分類される蒼龍である。

蒼龍はこの提督の艦隊において最も練度が高く、経験を積んだ艦娘だ。

先程連れ添っていた3人の少女もそれぞれ“白露”“五月雨”“時雨”という名前の艦娘で、特に時雨は“佐世保の時雨”という名で知られた武勲艦である。

「おう、邪魔してるぜ」

「お邪魔してまーす」

軽く手を挙げて2人に挨拶する。

彼らは隣の執務室の提督——同期であり、階級は同じく少将だ——と、その秘書艦娘である駆逐艦“雷”。

この雷は通常赤い髪飾りをつけているところを、彼女の提督の趣味で白い髪飾りに変えている。そこに“佐00690”と刻まれている。

隣とは言っても、鎮守府には各提督ごとに艦娘のドックや工廠が整備されている。ドックや工廠は地下にあるが、それらの面積を確保するために隣とは多少の距離があった。

蒼い執務机で鎮守府内有線LANと艦隊の通信妖精ネットワークに接続されたパソコンをスリープ状態から復帰させ、帰還を待つ提督と、その後ろに佇む蒼龍。

今のうちにやることだけでも帰還する艦隊への補給の手配、出撃予定の艦娘に対する出撃準備の呼びかけと装備確認。

場合によってはドックの整備妖精に緊急受け入れの指示が必要な場合もある。

ちようど第2艦隊とほぼ同じくらいのタイミングで帰還する予定の第3艦隊、第4艦隊は通常の遠征任務なのでドック入りの必要はない。

「もう少しマイペースにやったらどうだ？ 慌てんでも、もうしばらく作戦は続くだろう」

「そうよ、麦茶でも飲んだらどう？」

「あ、じゃあ用意してきますね」

蒼龍は執務室から給湯室へと歩いていく。

「……君達はいいのか？」

いかにも手持無沙汰といった様子の同期に、彼は問いかける。

向かいのソファ——金剛達がティーパーティーの際に使うものだ——で隣の提督の膝の上に座り足をぶらぶらさせている雷と、それを微笑ましく見つめる隣の提督は、雷の視線の先へと視線を動かした。「……そりゃ、鎮守府の家具屋に売ってある長門箆筒つて高いけどさ……自分で作ったのを置くか？」

「べ、別に何を飾ったっていいだろ」

雷の視線の先には桐箆筒。その上にはこの部屋の提督が組み立てた「戦艦 三笠」と書かれた市販の艦船模型が飾られていた。

実のところ桐箆筒の中にも別の艦船模型が入っており、実在した艦艇から架空艦である宇宙戦艦のヤマト、双胴航空戦艦近江まで収納されている。

「うちはまだ超弩級戦艦の場所を掴めていないからな。今はそつちと同じく偵察中だ。そうだ、タバコでも——」

「ダメよ司令官！ タバコは身体に悪いんだから！」

雷が、彼女の提督が取り出したタバコの箱を没収しようとする。

だがそれは提督が反射的に腕を上げてしまったことで背が届かなくなり、振り上げた腕は空振りに終わってしまった。

何度か雷は提督の膝の上で跳びはねて没収しようとするが、その度に彼女の提督は雷が届かない高さまで持ち上げている。

何度かそれを繰り返して、ようやく諦めたのか雷は瞳を潤ませながら彼女の提督を見上げる。

「うー……っ」

「だ、そうだぞ」

「ははは、大丈夫だよ雷。これはココアシガレットだ。大丈夫、ちゃんと禁煙してるよ」

「し、知ってたんだから……」

赤面し、俯く雷。渡してもらったココアシガレットを口に含み、拗ねたように顔を背けた。

「雷は相変わらず可愛いなあ」

「お、おだてたって……」

「提督さーん、もうすぐ睦月の艦隊が戻って来るっばい」

ちようどそこにやってきたのは、隣の提督の艦隊に所属する駆逐艦「夕立」。

わざわざ離れているこちらまで探しに来たのだろう。まもなく、執務室に夕立が現れた。

「やっぱりここにいたっぽい！」

「もうそんな時間か。そろそろ帰るか」

「……そういえば蒼龍、遅いな」

ふと、彼は給湯室の方を向く。

ちようど蒼龍の名前が出てきたので、隣の提督は今までずっと聞きたかったことを聞いてみることにした。

「そういえば、なんでそっちの艦隊は蒼龍が一番なんだ？ 言っちゃ悪いが、正規空母なら赤城とか瑞鶴の方が運用しやすいだろ」

「本当に、言っちゃ悪いわね……ごめんなさい、うちの司令官が失礼なこと言って」

「いや……まあ、なんだ。空母で一番早く来てくれたし、可愛いから愛着があるんだ。それに睦月型と暁型が至高だなんて言ってるお前さんに性能云々を言われたくないのだが」

「ちっちゃい娘は可愛いだろ！」

「それに異論はないが」

「ちよつと司令官、早く行かなきゃ」

「提督さーん、はやくはやくー」

提督の袖を掴み、執務室の出口の方へと引っ張ろうとする雷。入口から催促する夕立。

ちっちゃい娘について今から3時間の力説を始めようとしていた隣の提督は出鼻を挫かれ、傍らの少女に諸手を挙げて降参した。

「そうだった、相変わらず雷は可愛いなあ。じゃあ、頑張れよ」

「もう……」

「ごめんなさい、提督。麦茶、沸かしてなくて時間かかっちゃいました。帰られちゃったんですね」

入れ替わるようにして、蒼龍が戻ってきた。先程の会話が聞こえていたようで、その顔は少し赤い。

提督と自分が飲む麦茶を執務机に置き、残りは片隅の冷蔵庫へと入れた。

「その……提督。ありがとうございます。嬉しいな」

「いつも蒼龍には世話になってるからな。これからもよろしく頼むよ」

「はい！ 私こそ、よろしくお願いしますね」

「第2艦隊、帰還しました！ 第2艦隊、帰還しました！」

「……来たか」

通信妖精の声が執務室に——正確には、執務机のパソコンから響く。

時を置かずして、2名の少女が執務室の扉を勢いよく開けて入ってきた。

スクール水着の上にセーラー服、今は持っていないが、手には魚雷。頭には、甲標的の妖精と同じく潜水服を纏った通信妖精。

彼女達は、つい最近この提督の指揮下に入ったばかりの潜水艦娘である。

「司令官。 第2艦隊、帰投したわ」

「てーとく、見てた？ ゴーヤ、ちゃんと頑張ってたでしょ」

「ああ。今回は最後まで偵察できたようだな。 偉いぞ、イムヤ、ゴーヤ。じゃあ偵察結果の報告を頼む」

「はいでち！ えっと、おっきいのが1隻と、丸っこいのが5隻だったでちー！」

「……えっと」

「……あ、あはは……。 イムヤさん、説明お願いしますね」

執務机へ新たに冷蔵庫で冷やした氷と麦茶の入ったグラスを2つ置き、蒼龍は執務室に置いてあった椅子に腰かけて温くなってきた麦茶を飲む。

口調が幼い方は「伊58」、通称ゴーヤ。手に防水スマホを握っている方が「伊168」、通称イムヤ。

余談だがイムヤは太平洋戦争時において蒼龍ら二航戦、一航戦が沈んだ海戦において敵空母を撃沈し、仇を取った潜水艦だ。

「ありがと。 ええつと、妖精さんとスマホの情報によると確認されたのは“戦姫”級1隻。 残り5隻は“護衛要塞”級です。 詳しい位置なんかは通信妖精から司令官に届いてると思うわ」
「ふむ……」

彼はパソコンを操作し、先程イムヤから届いていた情報を再確認する。 情報は報告内容と間違いなかった。

南方海域に深海棲艦の超弩級戦艦が多数出現。 この強力な個体を各提督につき1隻以上葬るのが、今作戦の最終目標であると海軍司令部より通達されている。

「ああ、確認した。 さて——出撃だ、蒼龍。 イムヤ、ゴーヤはご苦労だった。 休んでいてくれ」

「ええ!? ゴーヤ達お留守番? 寂しいよお……」
「……そうは言ってもな、4回も敵駆逐艦に見つかって中破大破されちゃ、心臓に悪い。 まだゴーヤの練度が低いからとはいえ、すまんな」

「提督、心配だからってあんまり眠られなかつたんですよ」

「第3艦隊、帰還しました! 第4艦隊、帰還しました!」

麦茶を乗せていたお盆を抱え、蒼龍がクスリと笑う。 再びパソコンから通信妖精の声が届き、第3と第4艦隊の帰還を告げた。

「じゃあてーとく、御褒美に“間宮アイス”ちょうだい?」

「あー……すまん。 この前隼鷹達がドックで宴会やったらしくて、その時に誰かが食べて切らしてるんだ。 来月まで待ってくれ」

ごく自然に、彼はゴーヤの頭に手を置き、優しく撫でた。

「うみゆう……」

帰還してすぐここにやってきたのであろうゴーヤの髪は海水で濡れており、少々ザラついている。

「しれえ、出撃ですか?」

「提督、行くかい?」

「Hey! 金剛と榛名、呼ばれて来たヨー!」

「しれえ、第3艦隊帰投致しました!」

「第4艦隊那珂ちゃん、お仕事しゅーりよーしたよっ」

執務室が俄かに騒がしくなった。

執務室の正面、扶桑型が横に4人並べる程に広い地下からのエレベーターから降りてきたフル装備の5人の姿が見える。

舌つ足らずな調子で聞いてきたのは駆逐艦娘の雪風。そして時雨と第1艦隊所属の金剛型2名と気だるそうに欠伸と背伸びをしている北上。

駆逐艦では強運に恵まれた雪風が時雨に次ぐ練度を誇っており、3番手として最初の秘書艦である電が続く。

遠征から帰還した両艦隊はそれぞれ物資を手にしており、物資を置いてくる前に提督に報告する必要がある。

ちやうど執務室では第1艦隊の面々が集まりかけており、両艦隊旗艦の雪風と那珂は待ちぼうけとなっていました。

「雪風と那珂は少し待つてくれ。この前の集結地強襲作戦と同じように時雨、駆逐艦で一番練度が高いお前が旗艦だ。駆逐艦はあと、雪風だな。……ああ、第1艦隊の方だぞ」

「時雨、了解」

「任せてください！ 艦隊をお守りします！」

「蒼龍、サポートを頼む」

「はい、お任せください。……あ。そういえば提督の好きな皿うどん、さつき鳳翔さんと作ってたんです。後で食べてくださいね」
「ああ。蒼龍の皿うどんは美味いから期待しておくよ」

雪風がはにかみながら自身の胸をポンと叩き、時雨と蒼龍はいつものように微笑んだ。

*

——夏の日差しが照らす中、空を眺めた

——昔と変わらず空を舞う海鳥達を見て、かつてミッドウエーで最期に見た光景を思い出しました

——そして、私達は深海棲艦の巢へと突入しました

——アイアンボトムサウンド鉄底海峡突入時 蒼龍の航行記録より

*

南方海域、最奥部。 魔の海域、通称アイアンボトムサウンド。

海を割り、轟く爆音。 衝撃波が金剛の背にある46cm砲を中心に広がり、46cm砲の妖精達が金剛の頭にしがみ付きながら、双眼鏡を覗いている。

昔、多くの船が沈んだこの場所で、また新たな犠牲者が生まれようとしていた。

「——ッ！ ……アガ……ギッ……」

「だんちゃーく、命中！」

空母姫級がこちらへ向けていた砲塔らしきものが爆発し、残りの砲弾が空母姫級の腹部へと着弾するのが、遠目にも見えた。

遅れて、命中による爆発音が響き渡る。 半壊した砲塔で火災が発生し、更に大爆発を起こした。 空母姫級の艦体が腹部で真つ二つに裂け、爆発の勢いで吹き飛ぶ。

「直撃を確認！ 弾薬に誘爆した模様！ 敵 “空母姫” 級、沈んでいきますー！」

「Wow！ コングラチュレーションネー！」

「敵艦隊、残り空母ヲ級ー！」

蒼龍から発艦した彩雲の観測妖精からの報告が届く。

「こちら時雨。 敵、護衛要塞級を撃沈。 僕の方が早かったみたいだね」

「こちら雪風！ 要塞級、撃沈しました！ むむ、次は負けませんー！」

先の支援艦隊による航空攻撃と金剛の46cm砲の直撃を受けた敵艦隊の旗艦、装甲空母姫の下半身が前へと倒れて水飛沫を上げ、苦悶に顔を歪めた上半身はその影へと落ちていき、こちらも大きな水飛沫を上げた。

そこから少し離れた場所で、中破していた要塞級を快速で翻弄していた時雨が高角砲でトドメを刺す。 至近距離から放たれた高角砲の砲弾は、損傷していた箇所命中。 要塞級が力無く崩れ落ち、丸い身体が海の中へと沈んでいく。

同じように雪風も雷撃で時雨とは別の要塞級を炎上させ、ちようど沈めたところだった。

「ヲ……ヲヲ……！」

「後はあいっただけだねー。まー、とつと沈めて次行きましょ」
残るは、接敵直後に北上の雷撃を受け、中破した空母ヲ級。 たつた今轟沈した、空母姫級の方を見ている。

何か様子がおかしいような——中破する前から攻撃を躊躇っていたような気もするが——敵は敵だ。倒さなければならぬ。

「そうね、一気に仕留めてしましましょう。……攻撃隊、発艦はじめっ！」

蒼龍の右肩の甲板が空中に浮かび、その上を通過するように弓矢を構え、勢いよく矢は放たれた。 発艦した流星改がプロペラの回転音を響かせてヲ級ヘトドメを刺すべく飛んでいく。

キャノピーの上にしがみ付いた流星改の妖精が、流星改の抱えた魚雷を中破して攻撃してくる素ぶりのないヲ級目がけ、投擲した——。「ヲ……！」

最期の瞬間まで、ヲ級が攻撃してくることはなかった。

*

空母姫艦隊、更に敵前衛警戒艦隊を撃滅し、最奥部へと到達した第1艦隊。

臨戦態勢で前衛に雪風と時雨、次に北上、中央に蒼龍、後衛として金剛と榛名が蒼龍を守るようにして海を駆けていく。

他の艦娘は、多少損傷したところで砲雷撃戦は続行できる。だが、正規空母である蒼龍は甲板をやられれば航空機を発艦できなくなる。

必然的に、蒼龍を中心とした輪形陣を形成していた。

そこへ彩雲の観測妖精から連絡が入る。

「敵艦隊、発見！ 戦姫級1、戦艦夕級2、要塞級3——全て黄色のオーラ……フラッグシップです！」

「What!?! タ級デスか!?!」

「事前情報と違う……お姉様、皆さん。 注意しましょう」

「まー、何が来ても私の40門の魚雷でやっちゃうだけだよねー」

「丁字で迎え撃ちますよ、単縦陣、用意！ 転進！」

しかし、驚きはすれども焦った様子は彼女達には見られない。

それもそのはず、彼女達は全て高い^{Lv70以上}練度、蒼龍に至っては
トップエースである。

このベストメンバーであれば、苦戦することはあれども、心配する
ような事態にはなるまい——。

「何度デモ水底ニ、落ちテイクガイイ……」

海面に佇む、その異形が吼える。

「支援艦隊到着。 赤城、加賀、千歳、千代田が航空攻撃に入りますー！」

「こちらも攻撃隊、制空隊発艦！ 北上さん、合わせて雷撃をお願いし
ますね」

「よーそろー」

——そう、誰もが思っていた。

「全艦、砲雷撃戦始メ……！」

——その時までには。

*

「いたた……」

南方海域、海鳥が空を舞う夏の夕暮れ。 昼間の砲雷撃戦を終え、

一旦退避した艦娘達。

支援艦隊の航空攻撃は大した戦果を挙げられず、逆に反撃を受けて
蒼龍が大破。 帰れなくなった第2次攻撃隊はそのまま支援艦隊の
赤城に回収されている。

金剛、北上が中破判定で、榛名、時雨も小破。 ちなみに雪風は掠つ
た程度でほぼ無傷のままだ。

しかし敵艦隊も大損害を受け、夕級は2隻とも撃沈、護衛要塞も1
つ残して海の藻屑と消えており、残った要塞級は大破、戦姫も中破し
ている。

『蒼龍！ 蒼龍！ 大丈夫か!?!』

「もう、心配症ですね……。 お化粧直したいところですけど提督、
私は大丈夫ですから。 それよりも、敵にトドメを……」

『だが、大破しているようだが——』

「敵艦隊、要塞級の方はもう戦力になりません。 戦姫も中破してま
すし、攻撃を命中させれば勝てますよ」

『——分かった。第1艦隊、日没後、夜戦へと突入せよ。皆、絶対に生きて帰って来い』

「了解しました。皆さん、夜戦へ突入します！」

既に黄昏の太陽は水平線へと没し、夜の闇が南方海域を包んでいた。

敵艦隊の位置は捕捉している。最初に発見した場所から全く動いていない。

「艦隊、突撃！ 目標、戦姫級！」

敵味方、双方共に隊列を崩し、艦娘は戦姫に最後の一撃を叩きこむべく、戦姫級はせめてもの抵抗として、道連れをすべく。

月の光は雲に遮られ、届かない。闇の中、夜戦の幕が上がった。

「各艦、各個に突撃！」

金剛が、榛名が、北上が、雪風が、時雨が。戦姫級へと最大戦速で突っ込んでいく。

蒼龍は、距離を取って動かない。頭の上に乗っている通信妖精が、向かって行った艦娘と鎮守府との通信を繋いでいる。

「砲撃、開始するネー！」

最初に動いたのは金剛。片方だけ生き残っていた46cm砲の砲身が、彼方の海上に浮かぶ異形を撃ち倒すべく稼働する。

「全砲門、ファイヤー！」

夜の海に響く爆音。撃ち出された砲弾は戦姫級から僅かに逸れ、海面を激しく叩いた。

「shit！ 惜しいデース」

「これ以上、やらせません！」

数秒遅れて榛名。46cm砲と15.5mm3連副砲が稼働、重々しい音と共にほぼ同時に斉射された。

しかし、これは戦姫級が金剛の砲撃が着弾した影響で動きだしたことで回避される。

「あーもう面倒だなあ。ちゃっちゃとやられちゃってよー」

「雪風が、沈めます！」

「これ以上、僕達をやらせはしないよ」

「私ノ怒リト悲シミハ、コノ程度デハ消セナイ……！ マダ、戦エル……！」

ボロボロになった魚雷管から生きているものを一齐に発射する北上。

更に距離を詰めるべく海面を駆ける雪風と時雨。

もうすぐ決着が着く、その時だった。 観測妖精の音が、通信妖精越しに響いてきたのは。

「敵主砲、発射態勢であることを認む！」

「あ——！」

——その声は、果たして誰のものであったか。

戦姫級から放たれた赤い光が、一直線に迸る。

目標は迫りくる駆逐艦でも、長距離から必殺の酸素魚雷を放つ北上でも、戦艦でもない。

「え……」

——直後、直撃を受けていたのは最後方に位置していた、蒼龍だった。

前掛けの甲板が砕け、背の矢筒が吹き飛ぶ。 星々が地に、暗い海

面が空に。 再び星が空に、海が地に。

暗闇を見通す蒼龍の瞳は、海鳥が月明かりの下、夜空を舞っているのを見た。 それも束の間、着水の衝撃。

「敵、戦姫轟ち——」

『蒼りゆ——！』

仲間の声が、提督の音が、遠くなっていく。

——ああ、私……。

視界には、海面越しに輝く月の光。

フラッシュバックするのは、かつて『正規空母蒼龍』として見た、あの日の鋼鉄ドレントレスの海鳥の急降下爆撃が蒼龍に齎した結末。

——また、沈むんだ……。

蒼龍は、霞む視界の中で右肩の甲板を見る。 粉々になった腰の甲

板とは違い、こちらは大穴こそ空いているが原形は保っている。

——甲板の火、今度は消えてるね……。

炎は、海水で既に消えていた。今度は水中で大爆発を起こすことはないらしい。

最早、浮かび上がる力もない。矢筒から零れ落ちた流星改と烈風、彗星、彩雲の妖精が蒼龍に各々の機体を引っかけ、引き揚げようとジタバタしているが、それらも彼女と同じく月明かりの下へ帰還することはないだろう。

——ごめんね、貴方達も。提督、ごめんなさい……。

最後まで奮闘していた妖精達もやがて蒼龍に縋りつくようになり力尽きていく。

やがて、物言わぬ大戦時の艦艇の成れの果てが横たわるアイアンボトムサウンドの海底へと蒼龍は辿りついた。

深い闇の中、朧な蒼龍の視界に光が差す。何の光かまでは分からない。近づいてきているような気もする。

アイアンボトムサウンド。この地に沈む数多の艦艇の無念、数多の船乗りの怨念が深海棲艦を生み出した——そう言われてはいるが、真偽は分からない。

通常の兵器では歯が立たず、人類のみを襲う正体不明の敵。そして艦娘はそれらに対抗する存在——だった。もうその役目は果たせないが。

「イラッシャイ、歓迎スルワネ……」

どこからか聞こえた声も、もう蒼龍には聞こえていなかった。

ただ一つ、途切れそうになっていた視覚を最後まで保とうとしていた蒼龍が最後に見たのは、降り注ぐマリンスノー、深海棲艦らしき大きな影、光り輝く何か。

——きれ……い……

その光に包まれた直後、蒼龍の意識は漆黒に塗りつぶされる。

*

「蒼龍……轟沈しました……!」

先程まで蒼龍の頭の上に座っていた通信妖精が衝撃で吹き飛ばされ、気付いた時にはもう蒼龍の姿は見えなくなっていた。

『……何……?』

無事だった通信機で、それだけを報告するのがその通信妖精には精一杯だった。

『そんな……また、僕は味方を守れなかったのか……』

『しれえ、雪風……また、守れませんでした……』

『蒼龍が、沈んだ……？ 冗談じゃ、ないんだな……？ 蒼龍が……蒼龍……っ……！』

「……はい。責任は、私が……」

通信妖精は、その声音から通信の向こうの提督、戦姫のいた場所まで前進していた旗艦の時雨、雪風が自責の念に駆られ、深い悲しみに沈んでしまったことを感じ取った。

妖精なので詳しいことは知らないが、雪風は昔、随伴していた艦隊が悉く撃沈されている。友軍の幸運を食らい、ただ1隻生き残る死神、そう言われたこともあった。

いつだったか、雪風が初出撃して全艦無事に帰還した時は、*“*これでもう、雪風は死神なんかじゃありません！*”*と涙を流していた。

時雨も雪風ほどではないが、多くの仲間の死を見続け、最期には自身も撃沈されている。

グスグスと溢れる涙を拭い、通信妖精は毅然と提督に告げる。

「責任は、蒼龍と共に行動していた私にあります。 さようなら、提督。 蒼龍、万歳……」

『お、おい——』

無論、本来彼女に責任はない。通信妖精は艦隊の旗艦、もしくは指揮艦が離れた場所にいる所属艦隊各艦との意思疎通を図り、また鎮守府の提督と協議する為の存在だ。

だが、この妖精は着任当初から提督の信頼が厚い蒼龍と行動を共にしていた。

一方的に通信を切った蒼龍の通信妖精。 彼女の後を追うように、失意のまま海へと跳び込んでいった——

*

——過去の世界大戦で、多くのフネとヒトが海に散っていった

——時を超え、その怨念は我々の前に悪意ある存在として現れた

——それを「深海棲艦」と呼んでいる

——提督教育マニュアルより抜粋

*

——2ヶ月後。海軍司令部は夏に実施された南方海域の偵察結果を基に、本格的に南方海域への進出を決定。

ブイン基地他の最前線に艦娘と提督を送りこみ、深海棲艦の日本への接近を阻止しようとしていた。

「もうすぐ、忙しくなるな……」

提督の執務室に、久々に隣の執務室の提督が訪れていた。

最後に姿を見た8月、あの頃はあつた彼の澆刺とした雰囲気は失われ、表情も暗い。

また、カカオシガレットではなく安物の紙タバコに火を付け、この部屋の持ち主である提督にとっては好きになれない臭いが吐き出された。

「……ここは禁煙だ。それに、禁煙してたんじゃないのか？ 雷が怒るぞ」

「……雷は、もう……いない。この前の大規模作戦最終日、どこかの焦った大馬鹿提督のせいだな」

「……そう、か。タバコは消してくれ。俺は吸わないんだ」

「悪い……」

南方海域に進出し、激しさを増す海戦。海軍司令部より下った、新たな大規模作戦の実施予定。

その戦火は、幾多の不幸な轟沈を迎えた艦娘が、犠牲を顧みることなく捨て駒とされた艦娘が眠るアイアンボトムサウンドにも及んでいた。

だが、アイアンボトムサウンドにそのまま沈んでいる艦娘は少ない。その多くは、どこかへと流され、或いは運ばれる。

光の射す海面は遥か頭上。ここは物言わぬ艦娘達が眠る海底。

そしてこの日——アイアンボトムサウンドから少し離れたどこかの海底で、深海棲艦の巢で、何かが一斉に目を覚ました。

「寝チャツテタ……？ 大変、司令官のトコロニ戻ラナキヤ……」

「ア、アレ？ ヤツパリ、アイドルハ沈マナインダー」

「オ姉様ト、ハグレタノカシラ……不幸ダワ……」

「吹雪ハ無事……ダツタノカナ。 司令官、少シ休ンダラ、帰りマスネ」

「アノ野郎、ヨクモコノ摩耶サマヲ捨テ駒ニシヤガツタナ！ 一発ブン殴ラネエト、気ガ済マネエ……！」

「アレ、ココドコ？ ……暗イ!? ヤツタ、ココナラズツト夜戦デキル！」

「ウワ!? 視界ガ赤イ、ナンデ？」

海底が、急に騒ガしくなる。

生きていたことに喜ぶ者。 捨て駒にされた影響か、苛立つ者。

なんか暗いから喜ぶ夜戦主義者。 しかし、それらに共通するのは、とりあえず鎮守府に帰ろう”という思い。

——そして、それらの存在は全て、既に……。

「ココハドコ……？ 帰ラナキヤ……提督ニ、心配カケチャウ……」

黄色に染まった視界で、それ——蒼龍が、遙か遠くに微かに差し込む、秋の日差しを指して動き始めた。

*

「……翔鶴姉。 これ、どういうことだと思う？」

南方海域、珊瑚諸島沖。

普段であれば軽巡へ級や重巡り級フラッグシップといった敵前衛艦隊が待ち構えているその一帯。 しかし、どういう訳だろうか。

敵機動部隊を叩きに來た艦隊が目にしたのは、敵前衛艦隊ではなく戦姫級2隻、戦鬼級2隻、空母姫2隻というおよそ今まで見たことのない敵編成であった。

「……観測妖精さん。 索敵、敵にお願いね」

今まさにそこへ突入しようとしていた、呉鎮守府からやってきた五航戦姉妹が中核を担う艦隊が索敵距離ギリギリから敵艦隊の動きを探っている。

正確には、翔鶴から発艦した彩雲12機が。

『今までの偵察結果とまるで違う。何が起きるか分からない。いか、いざとなったら離脱して帰還しなさい』

「提督、了解しました。帰ったら今回の報告書を提出しますね」

四箇所に分っていた彩雲から、翔鶴の通信妖精を経由して翔鶴へ観測妖精から索敵結果の連絡が入った。

『彩雲1番から3番、異常なし』

これは敵前衛艦隊モドキの上空に放った部隊だ。ここからも見えている。問題ない。

『彩雲4番から6番、異常なしです』

続いて敵機動艦隊本隊上空から。こちらも問題はないようだ。

』

敵任務部隊方面。返事がない。

『彩雲10番から12番、異常——わーっ!?!』

「彩雲10番、どうしたの!? 7番から9番、報告は!?!」

ふと、機動艦隊本隊と敵任務艦隊の中間、敵水上打撃部隊上空からの通信が観測妖精の悲鳴に包まれた。

『敵支援艦隊、3隻がそっちに向かってます! 敵艦種は戦姫1、空母

姫1、未確認艦種1を認む! 11、12番機は空母姫と猛烈な対空砲火でげきつ——』

通信が、ぷつりと途絶えた。それを確認した翔鶴の判断は素早い。

「提督、撤退の許可を」

『許可する』

「ここまで来たのに、戦わずに帰るつてののか?」

艦隊の旗艦、軽巡の天龍が手にした剣を肩にかけながら、面白くなさそうな声で翔鶴に問いかける。その視線は敵前衛艦隊モドキの方向を見つめたまま。

瑞鶴はめんどくさそうに、投げやりに答えた。

「アンタが一人で行くつてのなら、止めないよ?」

「いや……流石に冗談だ」

「さて、撤退しましょう。……急いで帰った方がよさそうですよ。」

今、4番から6番機が撃墜されました」

「ああ？ ……追いつかれそうだな。 殿はオレと……木曾、オレとお前が殿だ」

「おう、仕方ねえ。 流石にこの調子じゃお前と一緒に懐に飛び込む訳にもいかないしな」

「お前は右を警戒しろ。 オレは左を見る」

接敵前であった事が幸いし、艦隊は滞りなく撤退していく。 途中、追いかけてきた敵艦戦を龍驤から発艦した紫電改二が迎撃。

敵艦戦を追い払った直後に三式弾らしき攻撃を受け、未帰還機多数となった。

どこかへ移動を始めた敵前衛艦隊モドキの代わりにやってきた“敵支援艦隊”——戦姫1、空母姫1、未確認1が、もう見えなくなつた艦娘艦隊の方向を見やり、呟く。

「覗キナンテ、失礼デスヨ……」

「ナア大和、アレハ……本当ニ敵ダツタノカ？」

「敵ガナンデアレ、今度コソ、才姉様ノ才役ニ立チマス……」

まだ生まれて間もないのか、薄れゆく大戦時の記憶を持ったそれら——かつて大和型であっただろう3隻の呟きは、沈みゆく夕日で琥珀色に燃える海へ、消えていった。

時は10月末。 敵前衛艦隊モドキ——もとい、敵主力艦隊とそれを援護する敵支援艦隊3隻がアイアンボトムサウンドへと移動していることを確認した海軍司令部は、全鎮守府、艦娘配備拠点へ大規模作戦の開始を告げた。

——アイアンボトムサウンドに突入し、敵主力艦隊を撃滅せよ！ 時を同じくして、海の底から鎮守府に帰ろうとする艦隊がいることなど、まだ誰も知らない。

秋の夕暮れ

*

後編 “秋の夕暮れ”

*

——どれくらい眠っていたのだろうか？

——いつからここにいたのだろうか？

——よく分からないが、とにかく、帰らねばなるまい

——提督が待ツ、鎮守府へ。我々の敵、深海棲艦ヲ倒ス為に……

——回収されることのない残骸の記憶の残滓より

*

“アイアンボトムサウンドに突入し、敵主力艦隊を撃滅せよ”

司令部からそんな命令が下されて1週間が経っていた。

「待たせたようだな。大和型戦艦2番艦、武蔵だ。よろしくな」

アイアンボトムサウンド最深部、無数に存在していた“超弩級艦隊群”を撃滅した提督に贈られる戦艦娘“武蔵”。

作戦開始より数日で数万の艦娘艦隊が突入したアイアンボトムサウンド最深部だが、深海棲艦は未だその勢力を保っていた。

狭いアイアンボトムサウンドに艦娘数万人が一度に突入できるはずもなく、その関係で各提督につき1艦隊撃破がノルマとされている。

だが何度沈めても再び現れる深海棲艦が相手ではキリがない。

提督達や司令部は知る由もないが、撃沈された深海棲艦の怨念が新たな深海棲艦を生み出しているという悪循環が起こっており、それが深海棲艦を完全に駆逐できない原因でもあった。

「ようこそ、佐00689司令部へ。こちらこそ、よろしく頼む」

「ああ……ところで、佐00689とはなんだ？ 名前は言えないのかい？」

「名前は山口、佐世保出身だ。この佐世保鎮守府だけでも5万以上

の提督がいるものでね。 そんな中で山口提督なんて呼び出したとしたら、1000人くらいずつとやってくるぞ」

佐世保鎮守府は、深海棲艦の脅威に対し、旧佐世保市を丸々鎮守府のスペースとして利用している。

それは横須賀や呉なども同様で、やはりそちらでも提督は横30000だの呉20000だの無個性な数字の羅列で呼ばれていた。

早い話、提督が多すぎるのだ。 だが、それでも深海棲艦を駆逐しきるには至らない。

「ふむ……そうなのか」

「武蔵。 早速だが、君の試験運用がしたい。 30分後、15時から演習の予定があるから、時間までに46cm砲を4つ装備して待機していてくれないか」

「フツ、早速か。 その内、演習ではなく実戦でこの主砲を存分に撃ち合いたいものだな。 ……期待していいか？」

戦意を滾らせ、獰猛に笑う武蔵。 対する提督はそれに動じることもなく首を縦に振ると、武蔵の傍らに立つ秘書艦娘「時雨」に——正確には「時雨改二」を見つめた。

「もちろんだ。 尤も、今は資材の問題があるが……。 ……時雨、こ

この案内を頼む。 今日の演習での旗艦は武蔵に譲るが、いつも通り時雨も参加だ」

「うん。 じゃあ、行こうか。 ……武蔵、って呼んでいいかい？」

「ああ、遠慮はいらないぜ」

「じゃあ、先に今日の演習で艦隊を組む人と挨拶に行こうか。 今日第1艦隊は武蔵、大和、時雨、雪風、摩耶、千歳……だね」

時雨はリストを読み上げながら提督の内心を察した。 いつもなら武蔵の代わりに金剛型の誰かが入り、時雨と雪風のどちらかと軽空母の千歳の代わりに一航戦の2人が呼ばれる。

しかし、流石に大和型2隻の燃費を心配したのだろう。 大和型2隻を除けばだいぶ低燃費に抑えられていた。

尚、普段は時雨と雪風は7:3で交代している。

「ほう、大和がここにいいのか？ それは良かった。 摩耶もちゃん

とやっているか？」

時雨は武蔵の手を引きながら「佐00689」と刻印されたプレートのある扉を通り、地下エレベーターへと歩き出した。

*

どことも知れぬ海域——強いていえば、アイアンボトムサウンドから東の海域。

「全ク、アノ時、初メテノ実戦ダツタノヨ！ ナノニ、ナノニ……」

「アー。 ヤッパシ、ドコモ同ジナンダナー。 チクシヨ……デモ、

ソレデモ昔ハ活躍デキタンダロ？ コノ深雪サマナンテ、昔ハ本番前ニ退場、今度モ捨テ駒ダゼ？」

「ゴ、ゴメンナサイナノデス……」

洋上で騒ぐ、大勢の駆逐艦。

昔よりマシ、などと言いながら不幸自慢をする者。 捨て駒にされ、憎しみを募らせる者。

提督に愛されながらも、艦隊とはぐれてしまった者。

「一刻モ早く、艦隊へ戻ラネバナラン」

「提督、怒ッテルカシラ……」

一方こちらは提督に重用されるも、敵の勢力下ではぐれてしまった戦艦、空母。

蒼龍が海上への帰還を果たした場所は、騒ぐ駆逐艦と暗い顔をした戦艦、空母の間だった。

「才前達、マダココニイタノカ？」

静かな風いだ海に響く、威圧的な声。

蒼龍は暗闇で目を凝らし、そちらを見る。

姿がぼやけて、何の艦種なのか判然としない。

戦艦組の方から1人、長門が立ち上がる。

「ドコノ所属ダ？ 私ハ横須賀鎮守府——」

「分カラナイ。 モウ、名前ガ思イ出セナイ……」

「思イ出セナイ……？ 何ノ用件ダ。 我々ハ、帰ラネバナライノダガ」

駆逐艦達も、騒ぐのをやめてそちらを注視し始めた。

しかし、誰が見ても長門と向かい合っている存在が誰なのか認識できないうらしく、今度はそれでぎわつき始める。

「誰、アレ？」

「サア……ヨク見エナイ……？」

「私ハ……日本ノタメニ造り出サレタノニ、ロクニ艦隊決戦モ出キズ、捨テラレタ……私ヲ捨テタ、人間ガ憎イ……」

長門の目が、すつと細くなる。こんな海のご真ん中で人間が憎いなどと言いきうな存在は、1つしか思い浮かばない。

——深海棲艦だ。

「貴様、新型ノ深海棲艦カ!? ナルホド、通りデ、知ラナイ姿ヲシテイ
ル訳ダ」

「ワカラナイ、ダガ、人間ハ私ヲ攻撃シテクル……私ハ人間ガ憎イ……
私ヲ戦イノ中デハナク、"アノ光"デ沈メタ、人間ガ……私ハマダ、戦
エタノニ……」

「黙レ、ソレ以上言ウト……」

長門は直感した。これ以上、こいつの言葉を聞いてはいけない！
「我々ト共ニ、人間ヲ喰ライニ——」

重々しい轟音が、凧いだ海に鳴り響く。海面が荒れ、波立つ。

ぼやけ、よく分からなかった存在に、至近距離から46cm砲の砲
弾が炸裂した。

「我々ハ、貴様ヲ深海棲艦トハ違ウ！」

もう1連射。その存在——深海棲艦らしき存在がまともに砲撃
を受け、消し飛んだ。

長門がその砲口から立つ硝煙を振り払い、駆逐艦、戦艦、空母その
他が固まっている方向へ——具体的に言えば、その両集団に挟まれて
いた蒼龍の方を向き、連合艦隊旗艦らしい威厳溢れる声で号令をかけ
る。

「才前達、集マレ！ 我々ハコレヨリ、所属原隊ヘト帰還スル！ 各鎮
守府ゴトニ、整列セヨ！」

*

その後、長門の一喝で横須賀、呉、佐世保、舞鶴、大湊、トラック、

リング、ラバウル所属へと早々に艦隊を形成した。

各鎮守府への帰還を目指す数万人の大艦隊が、足並みを揃えて海上を駆けていく。

横須賀は、先程の長門を旗艦に。

呉は最も高練度であった瑞鶴。

佐世保は金剛が旗艦を務めることとなった。

どうにもアイアンボトムサウンドから東に流されていたのか、日本への帰還を目指す艦隊は一団となって進む。

予想されていた深海棲艦からの襲撃もなく、順調に——順調すぎる程に、途中でリング、ラバウルへと別れていく——。

もし、提督達の運がよかったとするなら——この数がそのままアイアンボトムサウンドで目覚めていたとすれば、ショートランド、ブイン、ラバウルはトラックへの進行ルートとして数万の深海棲艦によって瞬く間に消え失せていただろう。

——翌日、ラバウル帰還組が全滅。更に翌々日にはリング組が全滅するが、日本を目指すその大艦隊にその情報が届くことはなかった。

*

出発から数日。足の遅い艦娘と足並みを揃えて動いていた日本への帰還を目指す大艦隊は、途中岩礁や深海棲艦のものらしき物資集積所を襲って補給を続けながら、日本へと確実に近づいていた。

しかし、数日前に深海棲艦によるラバウル、リング方面への強襲艦隊を迎撃、練度の低いこれらを1体残らず全滅させた海軍司令部は、先日の強襲艦隊の本隊を発見すべく各拠点に捜索を行わせていた。

11月某日、トラック泊地から強行偵察任務の遠征に向かっていた艦隊が、遙か遠方に何か小さな異物を発見する。

「クマー。何か見えるクマー。この辺に敵がいるなんて聞いたことないクマー」

「ほう。大破漂流しているはぐれ艦娘でもいるのかのう？ どれ、吾輩の索敵機を飛ばして見るか。索敵機の報告が来るまで、吾輩の後ろに下がっておれ」

頭の上に通信妖精をしがみ付かせた重巡艦娘、利根のカタパルトから発艦した水偵が空へと駆け上がっていく。

「物資だったら持って帰るにや。丸い物だったら多摩が貰ってもいいかにや？」

「さてのう。それは持って帰って提督に聞くがよいが、機雷はいかんどぞ。……ふむ？」

俄かに、利根の表情が険しくなる。

「うーむ、妖精殿。報告は正確にお願いしたいものじや。敵艦がこちらに向かっているというのなら、もう一度確認しては貰えんか」「物資じゃないのにや……」

「はぐれ深海棲艦なら、パパッと仕留めるクマ。提督も喜ぶクマー」
球磨と多摩は利根の影から出て、双方20.3cm連装砲を稼働させ、砲撃体勢に移る。若葉はそのままだ。

『繰り返します！ 敵、駆逐艦たくさん！ 巡洋艦たくさん！ 空母たくさん！ 戦艦もたくさん！ 以上です！』

利根は頭を押さえながら球磨多摩の前に手をかざし、砲撃体勢をやめさせる。

「……もういいわい。噂の大艦隊かもしれんの。偵察用カメラで写真撮って吾輩の通信妖精に送るのじや。ほれ、球磨に多摩、駆逐艦のちびっ子。一旦帰還するぞ」

そして通信妖精から情報を受け取った利根は、写された大艦隊を確認して真っ先に叫び、撤収の準備を始めた。

「……うむっ、緊急連絡じや！ 撤収！」

*

——深海棲艦とは、人類が生み出した悪夢

——遠い過去から蘇った悪夢

——深海棲艦とは……

*

「トラック泊地だ！ トラック泊地が見エタゾ！」

海底から蘇った数万の大艦隊は、ひとまず日本への中継地点としてトラック泊地を目指していた。

南西諸島海域最大の拠点、トラック泊地。ひとまずここへ辿りつければ、日本で待つ提督や同じ艦隊の仲間達に連絡を付け、安心させられる。

誰もが、そう考えていた。

「提督、一番先ニ会イニ——」

長門の弾んだ声が大艦隊に響き渡り、トラック泊地所属だったのだろう白露が集団を抜けて駆けていく。

その白露がしばらく海を駆けていった後、1発の砲声が轟いた。

不意に白露の艦首が大爆発を起こして仰向けに倒れ、爆沈した。

「ナツ……!?!」

遅れて、長門の耳は今のが自身と同じ46cm砲の砲声であることを聞きわけた。

「主力が出撃したからお散歩していたら、すぐ近くに敵の大艦隊がいるなんて……」

「貴様！・何ノツモリダー！」

超弩級戦艦の不幸姉妹、その姉の方。

その後方、非常サイレンを鳴らすトラック泊地地下から地表へ直接出撃する為の直通大型エレベーターで姿を見せるのは、駆逐艦娘や巡洋艦娘。

遅れて、正規空母、軽空母、航空戦艦、戦艦……まるでトラック泊地に待機していた全ての艦娘が緊急発進してきたかのようだ。

互いが視認できるほどの距離を挟み、トラック泊地を目指していた艦隊とトラック泊地から出撃した艦隊が睨み合う。

「目標、敵艦隊！」

「1体も逃すな！」

ずらりと並んだ赤城と伊勢のうち、1人が号令をかける。甲板を浮かばせ、その腕の弓に矢を番え、引き絞る。甲板を

それに倣うように、多数の加賀、瑞鶴、伊勢……とにかく航空機、水上機運用能力のある艦娘が攻撃態勢を取った。

これに混乱するのはトラック泊地を目指していた大艦隊だ。蒼龍も、そして旗艦の長門も例外なく困惑する。

「エ……？ ……ドウシテ、私達、狙ワレテイルノ……？」

「ヤメロ！ 我々ハ味方ダ！ 何故分カラナイ!?」

「接近される前にできるだけ沈めます！ ……てーっ！」

何の躊躇いもなく、トラック泊地所属艦娘達は攻撃を開始した。

1人の空母艦娘から数十機が飛翔し、空を覆い尽くす航空機。

砲弾と爆弾、魚雷が殺到し、練度の低い艦娘があつという間に喰われ、波間へと消えていく。

逆にこちらは状況が理解できない。 何故、味方が攻撃してくる？

何故、こうも敵意をむき出しにしてくる？

トラック泊地を指していた大艦隊は制空権を喪失した。

「何故……何故ダ！ 駆逐艦、下ガレ！ 装甲ノ厚イ艦は前ニ出口ー」

叫び、長門は前進して新兵同然といった有様の文月を庇い、直撃コースであつた砲弾を厚い装甲で弾いた。

本来の艦艇運用から行けば、駆逐艦こそが戦艦や空母といった主力艦艇の盾とすべきであろう。

だが、長門はそれをしなかつた。 ここまでなんとか帰つてくれた仲間達を、味方の手で沈めさせられる訳にはいかない。 もう仲間を失うのはたくさんだ。

——いや、あれハそもソも味方なのか？ 演習でもナイノに味方が

同ジ艦娘に対して攻撃スルのか？

——あれはずがない。 デは、コイツラは……！！

「全艦、応戦シロ！ 責任ハコノ長門ガ取ル！」

「デ、デモ……！！」

「味方ガ攻撃シテクルハズガナイ！ アレハ深海棲艦ダ！ トラック泊地ハ敵ノ手ニ落ちタノダ！」

長門の影で震える文月が、嗚咽を漏らし、泣き始める。 彼女はトラック泊地所属であつた。

「ソウイウコトナラ……一旦、退キマシヨウ！ 日本ノ鎮守府ニ連絡ヲ取ラナイト……！！」

蒼龍は出せる限りの声を張り、味方を支援する航空機を発艦させながら、前方で戦う長門へと叫んだ。

長門の叫びに応じ、やっところちらの空母からも航空機が発艦を始める。しかし、既に損傷した空母も多く、航空劣勢まで巻き返すのが精一杯だ。

——ドウ見てモ、普通ノ艦娘にしカ見エナイノニ、コレガ、敵……。大破したトラック所属の荒潮を助け起こそうとした朝潮がこちら側の霧島から放たれた主砲の直撃を受け、悲鳴を上げながら爆炎の中へと消えていく。

「ソウダ……ココマデ来テ、ヤラレル訳ニハイカン。殿ハ我々ガ務メル！ 後退セヨ！」

「支援シマス！」

蒼龍は意識を切り替えた。現に向こうはこちらを実弾で攻撃してきているのだ。流星改と彗星を発艦させる。

「え……」

「ソコカ！」

トラック泊地側から応戦していた陸奥の砲塔に彗星が投下した爆弾が運悪く直撃し、第3砲塔が一際派手な大爆発を置こす。

そこで素早く振り向いた長門が爆発を起こして大破した陸奥に狙いを定め、見事直撃させた。末期の言葉もないまま、陸奥は力を失い、二度と浮上することはなかった。

*

武蔵受領から数日後。武蔵の実戦参加は未だ叶わぬまま今日も演習が行われている。

「よし、突撃するわ！」

連装砲を放ちながらその言葉通り近距離戦への突撃を試みる、演習相手の朝潮。

昼戦も終わり、演習は夜戦——名目上そのように言われるだけで、演習においては昼戦の間に双方接近した後の至近距離戦闘だ——へと連れ込んだ。

朝潮はもう一度、連装砲を放った。砲弾は確かに命中し、狙われた艦娘は砲弾の炸裂に巻き込まれた。

「命中確認——!?!」

攻撃を終了した朝潮は離脱を試みる。しかし、少し遅い。煙の中で、ゆらりと艦影が揺れる。そのまま前進しながら爆煙を突き破り、ぱらぱらと砲弾の破片を散らしながらその姿を現したのは、武蔵だった。

「温いなあ！ 蚊に刺されたようなものだ！」

厚い装甲に阻まれ、朝潮の攻撃は弾かれていた。前進しながら46cm砲の一斉砲撃を行い、その内1発が朝潮の左足を捉えた。

朝潮のニーソとスカートが着弾の衝撃で破れ、悲鳴を上げながら前のめりに転倒して数回海面でバウンドし、頭から海中にダイブした。どうみても戦闘不能だ。

「朝潮さん、大破ー！ 戦闘不能ですー！」

演習を監督する妖精が白い旗を掲げ、宣言した。

首から上だけ海面から出し、朝潮は叫ぶ。

「……まだよ！ 初春！」

「妾の本領発揮じゃな！」

朝潮の絶叫に近い声に応えたのは翼の付いた連装砲を自身の周囲に浮遊させている初春。今は片方が連装砲の代わりに魚雷発射管を搭載している。

宙を舞い、距離を詰めた魚雷発射管とそれを操る初春。放たれた演習用の酸素魚雷が海面スレスレを飛翔する。艦娘が“魚雷”と呼ぶ魚雷の形をしたロケット弾は、武蔵が反応するより早く武蔵に直撃し、炎の華を咲かせた。

魚雷という名で呼ばれる為に最初ほどの提督も違和感を覚えるのだが、考えてみると艦娘も深海棲艦も海面上を歩いているのである。海の中を進んでいるは当たるはずもないのだ。魚雷なのに甲板に被弾したりするのはそういう理屈だ。勿論、通常の水中を進む本来の魚雷も存在している。

今度はしっかりと直撃し、武蔵の46cm砲が少し歪んで使用不能に陥っていた。

「武蔵さん、中破ー！」

「まだまだ……！ この程度では、沈まん！」

「仇は取りますよ、武蔵！」

中破した武蔵に代わり、次の攻撃順である大和が演習相手の次の攻撃順である比叡に照準を定める。

その様子を、彼女達が所属する艦隊の提督2人は結構離れた場所から双眼鏡で見ている。

「くっそ、大和型2隻相手とかねーよ……」

「……確かに、少し行きすぎた編成だったかと反省している」

演習相手、佐21830の比叡がひえーと悲鳴を上げて戦闘不能に陥つたのを見ながら呟く。

「だが……大和型だつて無敵じゃあない。 だろう？」

直後、武蔵の足元の海面から魚雷が飛び出してきた。 水中に潜む

潜水艦娘から放たれた魚雷だ。

「潜水艦か！ 油断した——」

演習相手の伊168が放った魚雷は一直線に飛翔し武蔵に直撃、武蔵は大破で戦闘不能。 続けて大破していたこちらの北上に代わり、向こうの伊58の魚雷が炸裂。 大和も回避が間に合わず、あえなく大破した。

「……してやられたな。 これは戦術的勝利か」

「かもな。 アンタはうちの朝潮と北上と比叡を戦闘不能に。 こっちは大和型2隻と北上を。 揃って戦術的勝利判定やろ」

雪風と時雨が爆雷を投下しているが、恐らく戦闘不能には追い込めないだろう。

「そういえば、例の南方作戦は終わったか？」

「いや。 飛行場の攻略が上手く行かん。 飛行場2つとか、ありやねーよ。 アンタ、どう攻略したんだ？」

「比叡と霧島の三式弾が運良く炸裂したんだ。 もう1回行ったら突破できるか分からんな」

「次の提督の突入があるからって、時限制にされてもな……。 大体、すぐ近くに別の飛行場がある訳だからそっち行けばいいのに、なんで俺らまで退かなきゃいかんのよ」

「編成はどうしている？ 良ければ相談に乗るが」

「あ？ 今出撃してるのは、大井、加古、筑摩、摩耶、それと榛名金剛だが……まあ、加古と筑摩は初陣^{Lv1}の囷だな。沈んで当たり前、生還すりゃ補給ケチって再突撃だ」

「……なんだと？ お前、艦娘をなんだと思ってる!?!」

彼——大和型2隻を所有する佐00689の山口提督が、佐21830を掴み上げた。

「あいづらだって生きてるんだぞ！ それを、まるで物のように——」
静かなる怒りに身を任せ、佐21830の身体が宙に浮いたが、すぐに手を振りほだき、拳の一撃でお礼をしながら着地する。

「やかましい！ 低練度の艦娘なんざ消耗品だ！ こうでもしなきゃ突破できねーんだよ！」

「他にやり方だってあるだろう！」

言葉と拳の応酬。既に演習は終了しており、双方の艦娘達が殴り合う提督の方を見つめ、手を出すべきか困っている。

「なら、アンタの霧島を貸せよ！ こっちの改造したばかりの霧島をくれてやらあ！」

「うちの艦娘を他人に貸し出せるものか！」

佐21830が拳をかわし、腕を掴んだ。そのままこちらに背を向けつつ、綺麗なフォームでの一本背負い。

佐00689はコンクリートの地面に叩きつけられかけるも、咄嗟にとった受身で大怪我は免れた。

「……そうだよ、これはうちの問題だ。 自慢の艦隊でさっさと終わらせちゃまったアンタには関係ない」

「……勝手にしろ。 悲しむのはお前の艦娘だ」

「世界の平和の為、人類の未来の為に……、加古も、筑摩も、俺にとってはあの化け物共を倒す為に必要な犠牲だ……！」

仰向けになったままの佐00689を見下ろす、佐21830。
やがて背を向けると、自身の艦隊に向けて怒鳴るように叫んだ。

「帰るぞ、撤収！」

「そら、提督。 我々も帰るぞ」

「ちよ、ちよつと武蔵!?!」

佐00689の背後から褐色の手が伸び、彼の身体を易々と持ちあげた。所謂お姫様だつこの体勢だ。

吹き飛んでいた軍帽を、時雨が拾い上げる。

「武蔵か。……せめて胸は隠しておけ」

先程の大破の影響で武蔵の胸と下半身を覆っていたサラシが千切れている。豊満な双丘とその頂に立つ桃色の突起が隠されることなく提督の眼前に晒されていた。

「なんだ？ どこを見ている？」

「もう……大和撫子としてはしたくないですよ……」

くつくつと笑いを洩らす武蔵と、赤面する大和。後ろで時雨がどこか面白くなさそうな顔をしている。

自分で歩ける、と武蔵の腕から降り、自身の白い軍服で武蔵の胸を隠せるように前後逆に着せた。

「……反応が薄いな。もしか、提督は男色か？ それとも、小さい方が良かったか？」

「安心しろ、ノーマルだ。胸も背も大小問わん」

「ならいい。……私は、提督の所に配属されて良かったと思っていますよ。さっきの奴のように消耗品などと言われて、奴の指揮下の艦娘も気分がいいはずがない。私達は兵器だが、生きているんだ」

「しれえ。しれえが犠牲を出さないように皆を運用しようとしているのは雪風も、時雨さんも皆よく知っています。だから、ああ言ってくれて、ありがとうございます。もう、目の前で味方を失うのは……嫌です」

「できれば、今の奴に喧嘩で勝って言い負かすところまでできれば上等だったんだがなあ！ 提督、もう少し鍛えるんだな！」

ハツハツハと豪快に笑う武蔵。

しばらく大和型や雪風と千歳、機嫌を損ねた時雨、気だるそうな霧困気の北上と歩きながら話した後、エレベーター前で艦娘と別れた。

彼は執務室の机に立っていた写真立てに向かい、哀しく微笑む。

「ただいま、蒼龍」

それは、彼が8月の作戦中に失ってしまった、愛していた艦娘の写

真。蒼龍と彼とのツーショット写真だった。

彼の心は永遠に欠けてしまった。ピースを求め、今は蒼龍の代わりに時雨を求めてしまっている。だが、今もどこか空虚な雰囲気を感じずにいた。

時雨のことも、蒼龍の代わりのように扱ってしまつて、悪いとは思っている。それでも止められないのだ。

「なあ……蒼龍。もう、2ヶ月半くらい経つんだな……」

ずっと、後悔していた。あの時、油断せず撤退していれば。ダメコンを積んでいれば、写真の中で微笑む少女は生きていただろうに、と。

そして今、低練度の艦娘を消耗品と言い放ったあの提督のようにしていれば、蒼龍は助かったのではないかなどと考えてしまった自分が許せなかった。

結局、沈むのが蒼龍ではなくなるだけで、艦娘を轟沈させたという事実は変わらないのだ。

そして、積み重なっていく艦娘の犠牲は次第に提督から罪悪感や轟沈時のショックを薄めていき、やがては佐21830のように轟沈を聞いても眉一つ動かさない、沈んでもいい消耗品扱いになる。

「認められるかよ、そんなこと」

二度と、失わせやしない。そう決意した。

そんな彼の下に数日後、司令部から命令が下った。

——数十万規模による深海棲艦の大攻勢を確認。硫黄島周辺海

域において敵が7割海が3割の状況となっている。しかし、敵は分散の愚を犯した。現在九州に接近中の数万規模の深海棲艦大艦隊を、佐世保鎮守府総出で撃滅せよ——

*

失意の中、硫黄島まで生き延びた大艦隊は既にズタボロであった。トラック泊地からの追撃部隊こそなんとか追い返し、または燃料弾薬の問題で引き返していったが、こちら側は練度の低い艦だけではなく、味方を庇った高練度艦すら脱落。

海を埋め尽くさんばかりだった数万の大艦隊は半数以上を占めて

いた低練度駆逐艦の大半を失い、トラック泊地所属艦は文月を含めて
数人以外はもういなくなってしまった。

「……ココデ、オ別レダ」

長門が振り返り、そう告げた。

出発した頃と比べ、その姿は少しずつぼやけ、だんだんと曖昧な存
在にしか見えなくなってきた。

蒼龍は薄れつつある記憶を整理する。

——我々は何のため、鎮守府へ向かッテイる？

——提督と再会するため。 損傷ト、段々ト大きくなッてキテイ
る、記憶の混乱などノ『違和感』ヲ解消するたメ。

——提督とハ？

——私ヲ迎えてくれる、優シイ人。

——では、私ノ名前ハ？

——正規空母……正規空母ノ、何？

驚愕する。 最早自分の名前が思い出せなくなりつつあつたなん
て。

そもそも、南の海から出発したのは一体何日前だっただろうか。
それすら、思い出せない。

「……金剛サン、霧島サン」

「……What? ソレハ、私デスカ？」

「何カ？」

蒼龍は肩で支えている存在へと視線を向け、問いかけた。

トラック島撤退の折に大破した、佐世保帰還艦隊旗艦の金剛。 あ
ちこちから煙を噴き出して速力も低下しており、最早戦闘能力は皆無
に近い。

蒼龍の反対側では、霧島が同じく金剛を支えている。

「私ノ名前、何デシタツケ」

しばらく間を置いて、返事が返ってきた。

「シー、Youノ名前ハ……蒼龍ネー」

「蒼龍……確カニ、ソウダツタ気ガスル」

「蒼龍。 オ互イ、提督ノトコロニ帰ツタラ、一緒ニオ風呂入ツテ、直

シテモラオウネ……モシ、モウ無理ダツタラ私ノコトハ……」

「馬鹿ナコト言ツテナイデ、行キマスヨ。提督ノトコロニ帰ツタラ、キツト大丈夫ダカラ……」

「……ソウネ。提督ガ入レテクレル紅茶ガ飲ミタイネー……」

「ソウヨ！ 司令官ガ、ナントカシテクレルンダカラ！」

蒼龍のすぐ脇を進む、〃佐00690〃と刻まれた白い髪飾りの雷が気丈に振る舞う。

硫黄島から西に進み、鹿児島島の南を通過して長崎、佐世保へ数万人は進む。

途中で呉鎮守府を目指す艦隊と別れ、舞鶴を目指す艦隊は下関を通過する為に呉帰還艦隊と共にいっていった。

多くの損傷艦を抱えた艦隊は途中の浅瀬に座礁、大破して放棄された輸送船と護衛艦から鋼材等を捕食しつつ、一路佐世保鎮守府を目指していく。

提督にもう一度会う為に。ドックに入って、だんだんと大きくなってきた違和感を消す為に。

数隻は捕食によって傷を癒したが、まるで量は足りていなかった。修理すれば違和感が消えるという訳ではないらしい。それでも、鎮守府に帰ればきつとなんとかなるだろう。

「テイ、トク……」

「提督サン……」

「シレイ、カン……」

ボロボロになっても帰ってきた私達を、提督は褒めてくれるだろうか。

あるいは、もう別の艦娘で自分の居場所を補填してしまったのだろうか。

不安は募る。だが、彼女達の思いは一つだった。

「ソレデモ、提督ノトコロニ帰リタイ——」

——しかし、当然ながら佐世保鎮守府が接近しつつある深海棲艦の艦隊を見逃すことなど、ありはしなかった。

深海棲艦から見て死角となる島影に、待ち構えていた艦隊あり。

多くの提督が南方海域攻略へと出撃し手薄とはいえ、戦力がないということはない。

この海域には、空母を含む要撃艦隊が複数待ち構えていた。

対応が遅れ、深海棲艦の群れが屋久島と奄美大島の間を通過すると判明した時、司令部は僅かな困惑に囚われた。

深海棲艦は、人も喰らう。深海棲艦が多く出沒する東南アジアは、既に人類の領域ではなくなっているのだ。

既に九州近海まで接近しているとされた時、近隣住民の生存は絶望視された揚句、その命を餌として、足止めとして使おうという案すら出される始末。

無論2島をノーガードにするほど海軍司令部も無能ではない。

南方海域から帰還中であつた複数の艦隊を屋久島及び奄美大島の住民をシエルターへの避難誘導と待ち伏せの為に潜ませ、上陸次第撃滅する命令を出した。

帰還中であつた艦隊の燃料も弾薬もほぼ底をついていた。提督を経由せずに各艦隊旗艦へ海軍司令部より直接下された命令は、実質玉砕命令と同じ。

が、そんな上層部の思惑は外れた。屋久島も奄美大島もまるで無視され、そのままの速度で九州の守りの要である佐世保鎮守府へと接近していたのだ。

『敵艦隊、北上を開始。まさか、本当に佐世保鎮守府を落とすつもりなのか……！ レーダーに捕捉！ これは……該当海域を深海棲艦が埋め尽くしています！ まさに海が3に敵が7、です！』

『連中、本当に数万の艦隊で攻めてきたつてののか！』

『落ち着け。邀撃艦隊の艦娘諸君。私は佐世保鎮守府総司令官、佐00001、中村だ。再三、諸君らの任務内容については説明されているはずなので簡潔にまとめよう。要撃艦隊主力である空母艦娘により、日没までに敵艦隊を航空機にて可能な限り撃滅し、主力艦隊の露払いを実施せよ。敵が海3に敵7であれば、我々は空が2に味方が8をやるまでだ。諸君らの無事な帰投を願う。以上だ』

離島の1つに陣取った佐00690所属の要撃艦隊の夕立は、隠れ

ていた防波堤の影から身を乗り出し、防波堤の上へと飛び乗った。

すぐそばに隠れていた同艦隊の空母艦娘5と、別の提督が指揮する空母艦娘18が、艦載機発艦準備に取り掛かった。

およそ30艦隊に相当する要撃艦隊。同艦隊所属の空母が、一斉に発艦準備をしていた。

「提督さん、敵艦隊見つけたっばい。主力艦隊の出番取っちゃうくらいいにやっちゃってもいいの?」

『やれ。敵を減らせるならそれに越したことはないだろ』

「了解っばい。さあ——」

彼女の背後で、翔鶴から、瑞鶴から、赤城から、加賀から、瑞鳳から発艦した航空機が飛び立った。

「最っ高に、素敵なパーティー始めましょー!」

彼女——白い髪飾りを付けた夕立は勢いよく防波堤を蹴り、艦娘が生み出すその脚力で空高く跳躍。

空へと飛び出した夕立を、黄昏に沈む夕陽の光が迎えた。

もうすぐ、陽が沈む。空母の出番は夜戦になるであろう主力艦隊にはない。

日没までに空母のアウトレンジ攻撃で敵艦隊を漸減させるのが要撃艦隊の役目だ。

タイミングを図っていたのか、やはり近くの岩場から綾波と比叡が航空機と共に姿を現した。

少しだけ前進してその場に留まり、主砲を構える比叡と単艦突撃する綾波。

「酸素魚雷さん、目標、敵戦艦っばい!」

その跳躍の最高点で無数に飛び立つ艦載機を背にしたまま、顔の描いてある意思を持つ魚雷——酸素魚雷さんを2つ投げ放った。

酸素魚雷さんは島風の連装砲ちやんと同じく意思を持つ兵装だ。

酸素魚雷さんは空中で赤い推進炎を吐き出しながらその軌道を標的へと誘導し、標的とされた空母ヲ級と戦艦夕級に支えられているらしき戦艦夕級へと吸い込まれていった——

*

——見覚エノアル風景、見覚エノアル仲間達

——ナノニ……何故……？

——回収されることのない残骸の記憶の残滓より

*

「——敵襲ッ！」

突如、蒼龍は金剛の叫びを聞き、次いで誰かに突き飛ばされる感覚を覚えた。その直後、爆発音が2度、響く。

間近で起きた、激しい爆発。振り向いた時、金剛は何かの直撃を受け、今まさに轟沈するところだった。

「ア……提督……。ゴメンネ、先ニヴァルハラデー——」

「姉サン!？」

最期の言葉も言いきれぬまま、背中中で再び爆発を起こし、V字に折れた金剛は海中へ完全に没した。蒼龍の伸ばした手は、空を切る。

それは警告にしても、あまりに遅すぎた。見上げた空に浮かぶ、無数の鋼鉄の海鳥。

複数の方向から攻めてきている。佐世保鎮守府に待機していた高練度空母が総出で出撃していた。

「対空警戒！ 敵潜水艦ニモ注意シテ！」

無意識のうちに蒼龍は烈風、彗星と流星改を発艦させる。敵の数が多すぎる。

「ア、アアアアッ！」

蒼龍から発艦した深海棲艦化した烈風ヲ級艦載機の妖精が奇声を上げ、赤い推進光を放ちながら迫りくる烈風隊へと襲いかかった。

ヲ級艦載機のレーダーは、敵機らしき反応で溢れかえっている。だが、深海棲艦化した妖精はそのようなこと気にも留めない。

「敵機、正面！ 機——」

烈風が機銃を放つより早く、深海棲艦化したヲ級艦載機が急加速、バレルロールしながら機体を上昇させ、そのまま翼端の爆弾を1発切り離れた。ヲ級艦載機は烈風の上をすり抜けていく。

「——銃斉射——!？」

遠心力と慣性で勢いの乗った爆弾は真正面から烈風の機体に突き

刺さり、次いで炸裂した。烈風が1機、海面に着水することなく木端微塵に砕け散り、烈風の妖精は命からがら飛び下りた。

「爆弾で!? 出鱈目ですー!」

「お、追い込むです! こっちの方が数で圧倒して——!」

「ア、アアアッ!」

吹き飛んだ隊長機の破片が後続を襲い、煙を噴いた艦載機も隊長機を落とされて動揺した烈風も、集団で突っ込んできたヲ級艦載機の機銃で薙ぎ払われた。

近未来的な風貌のヲ級艦載機だが、それらがどうやらミサイルを搭載していないというのは人類にとつて僥倖であった。

ミサイルなど搭載していた日には、烈風すら抵抗できずに制空権を失っていただろう。

ヲ級艦載機は艦戦を爆弾と機銃で撃墜した後、一直線に動きの遅い天山へと喰らい付いた。

「わーっ! わあーっ!」

航空魚雷投下の為に低空へと移動していた天山と流星は背後からエネルギー機銃の掃射を受け、天山の妖精が慌ててラーメンを放り投げるも、成すすべなく爆発炎上して落ちていく。

一通りの艦攻を喰らったところでヲ級艦載機は頭上から突っ込んできた烈風の編隊から機銃弾を受け、海に墜落した。直後、その烈風編隊は又級艦載機に追いかけて散り散りになる。

佐世保帰還艦隊には正規空母は蒼龍1人しか残っておらず、軽空母は数十人いるだけ。しかも満身に発着艦できる数はその半分にも満たない。

後はむしろ対潜装備を抱えたまま南の海に取り残された軽巡や駆逐艦が中心だ。

それらの集団の中に飛び込む綾波と夕立。だが、夕立の姿は蒼龍達が見たことがない姿になっている。

勿論知っている筈がない。それはつい最近高練度の夕立のみ改装が許可された夕立改二であったからだ。

綾波と夕立は途中で別れ、夕立はこちらの集団へと最大戦速で突っ

込んでくる。

「ソロモンの悪夢、見せてあげる！」

海面を滑るように駆け、川内に飛び蹴りをお見舞い、その反動で川内から離れながら太股の魚雷を1発発射。

致命傷を受けた川内が黒煙を噴き、足を止める。 夕立の12. 7

c m連装砲B型改二が川内の艦首を吹き飛ばした。

「ソロモンの悪夢、見せてあげる！」

海面を滑るように駆け、那珂に飛び蹴りをお見舞い、その反動で那珂から離れながら太股の魚雷を1発発射。

致命傷を受けた那珂が黒煙を噴き、足を止める。 夕立の12. 7

c m連装砲B型改二が那珂の艦首を吹き飛ばした。

「ソロモンの悪夢、見せてあげる！」

海面を滑るように駆け、神通に飛び蹴りをお見舞い、その反動で神通から離れながら太股の魚雷を1発発射。

神通が黒煙を噴き、足を止める。 夕立の12. 7 c m連装砲B型

改二が神通の艦首を吹き飛ばした。

「少シ、戦イニクイデスネ……！」

そのまま仰向けに倒れて撃沈された那珂や川内と違い、中破で抑えた神通は赤く輝く瞳で夕立を見据えながら体勢を立て直し、反撃で魚雷3発を発射する。

夕立はその内魚雷2つを連装砲で撃墜し、1発を回避。 逆に脚の魚雷発射管に残っていた最後の魚雷を叩きこみ、神通を沈黙させた。

それはまさに水を得た魚。 乱戦の最中、夕立は踊るように軽巡3隻を瞬く間に駆逐した後、制空権を確保した艦爆、艦攻や数隻を中破させた綾波と共に次々残存していた駆逐艦、巡洋艦を屠っていく。

「フツザケンナコリアー！」

三式弾で複数の彗星を撃墜した佐世保帰還艦隊の摩耶が黄色く光る瞳を怒りに歪ませ、20. 3 c m砲を連射する。

砲弾は既に撃ちきった魚雷発射管を捉えて砕き、夕立の背中にあった煙突を掠めアンテナを折った。 至近を通過した砲弾の風圧が夕立のマフラーを引き裂く。

「酸素魚雷さん！」

夕立は握りしめていた最後の酸素魚雷さんを放り投げる。

「アタシノ対空砲火ヲナメンジヤネエー！」

酸素魚雷さんは空中で不規則な軌道を描き、接近する。しかし高角砲の一撃が掠めたことでその機動を狂わせ、錐揉みしながらもう一撃受けて爆散した。

「そっちは囧っばい！」

「クソガツ！」

酸素魚雷が生み出す激しい爆発の下から、夕立が腰部に搭載された左右の単装砲を超至近距離で浴びせる。

たちまち摩耶は左手の連装砲と胸に被弾し、血とオイルを吐きながら壊れた連装砲を投げつけ、夕立を追い払った。

それと同時に摩耶は左へ大きく跳び、背後から迫っていた綾波の魚雷をかかわす。

——ここデ敵ヲ食イ止めて、駆逐艦達ハ先ニ逃ガス？

——ソれは無理。敵航空隊カラいい的ニサれるダケ。

——コンな時、提督なら……？

既に烈風は全滅していた。唇を噛みしめる蒼龍。だが、その蒼龍と敵航空機の間には立ちはだかる2つの巨影。

やはり姿はぼやけてきており、誰なのかよく分からなくなっている。しかし、その2人が猛烈な対空砲火を打ち上げ始めたのは分かった。

「フツ……マサカノ航空戦艦ノ時代ガ、来タヨウダナ」

「マ、水上機ハ積ンデナイカラ、名前ダケノ四航戦ダケドネ……デモ、四航戦ツテ、ナンダツタツケ……」

「瑞雲ヲ運用シ、瑞雲ヲ愛スルノガ四航戦ダ」

「……ソウダツケ？」

41cm主砲、12.7cm高角砲、30連装噴進砲に対空電探を搭載して南の海に散った航戦伊勢と日向。

既に制空権を失い、敵の艦攻艦爆が殺到したところで始まった対空砲火は瞬く間に敵機の数減らしていく。

見れば、押し込まれかけていた佐世保帰還艦隊の各所から激しい対空砲火が打ち上げられていく。

蒼龍は己を恥じた。制空権を奪われたからといって、諦めるわけにはいかないのだ。

ここを突破し、提督の所へ帰る。そうすれば、いくらでも艦載機の補充もできるのだから。そして、航空機を飛ばすチャンスは敵機が減った今こそその時だ。

「今ノウチニー！ 攻撃隊、発艦！」

蒼龍から再度彗星が飛ぶ。それは夕立の頭上へと飛び去った後、急降下攻撃を敢行した。

だが、その夕立の手には夕立と同じ「佐00690」の白い髪飾りの雷の頭が握られている。説得しようと思つたのが運の尽きだった。

「ヤメテ、夕立！ 私ノコト、ドウシテワカラナイノ!？」

尤も、夕立から見れば黄色いオーラを纏った駆逐口級にしか見えず、雷の言葉も「ロロロ」としか聞こえてない。

落ちてきた爆弾が雷に直撃する。紅蓮の炎が雷の胸を焼き、弾頭の破片がその肌を切り裂く。

「危なかつたっほい！」

かつての僚艦を爆弾の盾にし、投げ捨てる夕立。躊躇なく大破し、一部が炎上している雷へ砲門を向ける。

敵は敵、倒さなくちゃいけない。放置しておけば、この正体不明の敵は人間を喰らい、船を喰らって資材を補給すると傷ついた身体を再生させてしまうのだから。

「デメエ！ ソイツハ才前ト同ジ艦隊ダツタンダロウガ！」

「不愉快ヨ……徹底的ニ追イ詰メテ、沈メテヤルワ」

摩耶と不知火が放った砲撃を夕立は炎上する雷を盾にするように動いて回避する。

黄色い瞳を輝かせた不知火が出撃前に提督に搭載してもらった強化型本式缶にものを言わせ、高角砲を放ちながら追いかけてようとするが、それに割り込むように綾波がフォローに入る。

雷の意識は既に朦朧とし、走馬灯で彼女の司令官の幻を見ていた。暁の水平線に沈みゆく夕陽の逆光を背負う夕立。その前に両膝をついて涙を流す雷。

「司令官……泣カナイデ……私ガイル、カラ……」

幻を抱きしめようと、炎に包まれてゆきながらも両手を伸ばす雷。

次の瞬間、雷の身体は夕立が不知火の攻撃を掻い潜りながら放った砲弾で千切れ飛んだ。

不知火は歯軋りしながら空を見上げ、次に笑みを浮かべる。雷に気を取られた夕立はまんまと急降下爆撃を行わんとする艦爆の真下に移動していた。

彗星から爆弾が切り離され、夕立の艦首を爆破すべく落ちていく。

「夕立さんー！」

「綾波?！」

が、その爆弾を受けたのは夕立を庇った綾波だった。背中の煙突が爆発、穴が空いて機関の出力も落ちたが、まだ戦える。そう綾波が思った直後、高角砲の砲弾が綾波の胸を貫いた。

体当たりされて弾き飛ばされた夕立は驚愕に顔を染めると共に、綾波を襲った凶弾の射手、不知火を連装砲で撃ち抜く。

不知火の脇腹を貫いた砲弾は、左脇の下にあった連装砲を直撃し、弾薬に引火。爆発して不知火に致命傷を負わせる。

「夕立さん……無事ですか……?！」

「バ、バカ……もうそれじゃ、戦えないっぽいー！」

綾波はマイペースに、夕立を眺める。自分は無理だが、夕立はまだ戦えそうだ。

「……なら、良かった」

綾波は反対側に視線を戻した。黄色いオーラを纏った駆逐口級が、黒煙を吹きながら突っ込んでくる。

「死ナバ諸共……貴方モ、一緒ヨ……!！」

不知火は残っていた全酸素魚雷の安全装置を解除。最期の力を振り絞って不知火が綾波にしがみついた。

「司令官、申シ訳アリマセン。不知火ハ、戻ルコトガデキマセン……」

！」

限界を超えて稼働させていた機関が損傷に耐えきれず、不敵な笑みを浮かべたまま不知火は最期の宣言通り爆散した。

「あやな——」

「余所見シテンジヤネエー！」

跡形もなく吹き飛んだ綾波。そこから目を離せなかった夕立は、背中から襲ってきた衝撃で自らが致命的な隙を晒していたことに気付いた。

摩耶に重巡のパワーで背中中の煙突を蹴り壊された夕立は、前のめりに倒れていく。直後、蒼龍の流星改が放っていた魚雷が夕立の左膝に飛来した。跳び上がったって避けようとする夕立だが、間に合わずに爪先へ直撃を受ける。

「うあ……っ！　ハンモック、展開！」

爆発で空中に打ち上げられた夕立は背中中のハンモックを広げ、その空気抵抗を利用してなんとか頭から着水することを避ける。

しかし続けて長良から放たれた機銃弾が空中の夕立の両足を複数貫いていた。夕立の両脚は大きく損傷し、もう動けない。

「あ、あれ……夕立も、もう戦えないっぽい……？　提督さん……吉川艦長……」

「チエック、1、2……。　ヨシ」

邀撃艦隊によって多くの仲間を失った佐世保帰還艦隊。

結構離れた場所では引き際を誤った要撃艦隊の島風が多数の北上と大井による雷撃で撤退支援を受けていたが、山城の砲撃を浴びて轟沈していく。

動けない夕立の前に進み出たのは、つい先ほど三式弾で敵航空隊の一角を吹き飛ばし、伊勢と日向が航空機を撃墜している間に隠れていた空母のところへ単身殴りこんで手投げ三式弾と主砲でもれなく全員発艦不能、もしくは撃沈した霧島だった。

夕立の背に翻るハンモック。かつて夕立が艦娘ではなくただの駆逐艦だったとき、その白いハンモックを白旗と誤認した米兵は「ぶさけるな」と怒って夕立にトドメを刺したという。

だが、夕立を取り囲む深海棲艦達は白いハンモックを見たところで何の変化も起こさなかった。無論、夕立もそんな期待を抱いてなどいない。

深海棲艦は捕虜を取ることもしなければ、艦娘や人類との間に結ぶような条約も当然存在しない。どちらが水底に沈むか、ただそれだけのルールが存在しない殺し合い。

重厚な音と共にまだ主砲全砲塔が稼働できることを確認した霧島はその闘争心に身を委ね、主砲の砲門を夕立へと向けた。

「……あれ？」

海面に夕陽で深海棲艦の姿が映りこんだ。海面に映った戦艦夕級はどこか特徴的な服装をしている。

まるで金剛型のような——しかし、相変わらず言葉は通じない。やはり夕級の言葉は夕立には「タタタ」としか聞こえないのだ。

沈みかけた夕陽は、夕立を囲む深海棲艦の姿をいくつか水面に映した。

赤いスカートにセーラー服の長良型らしき姿。いくつもの魚雷をこちらに向ける丈の短い白い服の重雷装巡洋艦。頭からアン

テナらしきものを生やしたミニスカートの姿。

「まさか、まさか……っほい？」

「駆逐艦ニシテハ、ヨクデキマシタト言イタイ所ダケド……」

ひび割れていた眼鏡を、霧島は片手で握り潰す。黄色く鋭い眼光が夕立を射抜き、夕立の主砲へと手を伸ばした。

まさか、深海棲艦とは艦娘の成れの果てなのでは——そのような恐ろしい考えに一瞬囚われた夕立は、抵抗するのが遅れた。

駆逐艦と戦艦、そのパワーは比べるまでもない。抵抗しようとする夕立から容易く12.7cm砲B型改二をもぎ取り、やはり片手で握り潰した。

目の前で姉を殺され、地獄の悪鬼か阿修羅の如き表情で夕立を見下ろす霧島は、次にこうなるのはお前だと言わんばかりに笑みを浮かべる。

「金剛姉サンノ仇……！
三 式
マイクチエツクノ時間ヨ！」

その言葉を最期に、霧島の姿はぼやけ、艦娘と深海棲艦が混ざり合った中途半端な存在から越えてはいけな一線を越え、真の意味で深海棲艦へとその魂を墜とした。

深海棲艦に近づきつつある他の佐世保帰還艦隊の面々も、東の海で長門が深海棲艦を砲撃する時のような違和感を覚えることはもうできなかつた。

小爆発と共に黒煙を噴き、完全に使用不能となった砲塔を放り投げ、空いた手に真つ赤なマイク——もとい、手投げ三式弾を取り出し、戦艦のパワーで勢いよく夕立へ向かつて投げる。

同時に主砲からも三式弾を発射。手投げ三式弾は零式時限信管により夕立の眼前で炸裂。焼夷弾を拡散させ、夕立を焼き尽くす——かと思われた。

「……逃ゲラレマシタネ。 対潜警戒、厳二！」

上空の彩雲は見ていた。海中から潜水艦娘が夕立を海中へと引きずり込み、逃走する瞬間を。

夕立が大暴れした影響で駆逐艦や軽巡がまともに対潜警戒できなかった中、中破している五十鈴が爆雷を投下するも悠々と侵入した潜水艦は夕立を連れて脱出を果たしてしまった。

霧島だった夕級は咆哮を上げる。その絶叫に込められたのは仇を仕留められなかつた怒りか、姉を喪つた悲しみか。答えは、深海棲艦しか知らない。

*

夕立が気が付いた時、既に夕日は沈んでいた。海水を飲んでしまいい、むせる夕立。

「……生きてるっばい？」

「気がついた？ G u t e r A b e n d、佐00689に所属している、はっちゃんです」

目を覚ました場所は佐世保鎮守府から少し離れた場所の岸壁だ。

夕立は「佐00689」の伊8に支えられ、上陸する。

「皆はどうなったっばい？」

「一緒に出撃された佐00690の空母の方なら、イムヤちゃんと

ゴーヤちゃん、イクちゃんが既に回収されてます。何人が撃沈されて瀕死だったそうですが、幸い陸地の上だったり水深1メートル以下だったりで着底してたから引き揚げたようよ」

「お疲れ様です」

「後は、我々に任せろ」

海は既に夜の帳が降りている。市街地に灯りはなく、遠くの鎮守府のみが眩いライトで照らしだされている。

岸壁に据えられた正面の海を照らすライトにはまだ灯りが灯っていない。そのライトによりかかるといって、声の主はいた。

「演習ばかりで退屈しかけていてな。また存分に撃ち合うこともできないのかと思っていたが……初陣がこのようなことになるとは。

提督に伝えてくれ。最近流行りの、やたらでかい「はんばあがぁ」とやらを用意して待っている、とな」

「武蔵。一度食べたことがありますけど、あの「はんばあがぁ」はなかなか美味しかったですよ」

「ほう、大和はもう食べたことあったのか。それは楽しみだ」

巨大な砲門、重装甲重火力。大日本帝国が多額の予算をつぎ込んで生み出した超弩級戦艦、大和型の1番艦「大和」と2番艦「武蔵」。

鎮守府に待機していた全大和型が佐世保鎮守府から見て南西沖の海上、もしくは島にずらりと並ぶ。その数、1000は下らない。

それが深海棲艦が鎮守府正面に侵入、もしくは上陸しようとした場合の最終阻止線として配備されている。

今しがた話しかけてきたのはやはり伊8と同じ、佐00689に所属する武蔵と大和だった。伊8と同じように「佐00689」と

書かれた髪飾りを付けている。その手には司令部から大和型1人1人に振る舞われた間宮アイヌ。既に空になっていた。

ちょうどその時、大和の頭に座っていた通信妖精から、提督の声が聞こえてきた。

『聞こえている。佐世保バーガーだな？ 用意しておこう』

「ああ。そうだ、久々に皿うどんも食べたいのだが」

『皿……うどん……？ あ、ああ。 分かった』

それきり、一旦通信が切れた。最後に、“蒼龍”と小さく呟きを残して。

大破した夕立は伊8に連れられ、大和と武蔵の後ろを通って鎮守府の方向へと海を歩いていく。

「提督は皿うどんが嫌いなのか？ それに、蒼龍と言っていたが……うちに二航戦の艦娘はいなかったと記憶しているんだが」

「いえ……確か、私が提督の指揮下に入った時、蒼龍さんは撃沈されたとか……」

『こちら、佐世保鎮守府総司令だ。 今作戦、燃料及び弾薬は作戦完了後、こちらから支給する。 敵を1隻も生きて帰らせるな。 諸君、

佐世保の精強さを亡霊共に叩きつけてやれ！』

『目標、まもなく五島―野母崎ラインを通過。 対水上戦闘用意――』

「……皿うどんのことは後にしましょう」

「そうだな」

既に太陽は沈んでおり、空母艦娘による援護は行えない。

その為、まず潜水艦による海域封鎖を行い、大食らいとして多数鎮守府に待機していた大和型による一斉砲撃を実施。その後、駆逐艦などにより残敵掃討を実施することになっていた。

*

言葉もなく、生き残った蒼龍達数百人は一路、佐世保鎮守府を指す。蒼龍が見上げた先、海鳥はここを出発した時と何も変わらず、空を舞っていた。

既に、鎮守府正面海域と呼ばれている海域に入っている。近海で同じように鎮守府に帰ろうとしていた吹雪や響といった駆逐艦数隻を迎え入れたが、戦力としては心もとない。

――モウスグ佐世保鎮守府、モウスグ、提督ノトコロ……

炸裂音が、遠くから響く。佐世保近海で発生した局所地震が海と

大地を震わせた次の瞬間、佐世保鎮守府の大型レーダーからの情報を基にした大和型から数十発の46cm砲弾が霧島めがけ降り注いだ。

砲弾が海面を激しく叩き、巨大な水柱をいくつも立て、津波が起き

る。砲声に驚いた海鳥が翼をバタつかせ、逃げていった。

霧島の姿はない。既に鋼材1つ残さず消し飛んでいた。同じような水柱が、佐世保帰還艦隊のいた場所でいくつも立ちあがった。大和型の一斉射はたった2回。しかし、その2射と後方から放たれた潜水艦娘の魚雷で佐世保帰還艦隊は最早両手で数えられるだけの数まで減らされていた。

「モウ少シダッタタンダケドナア……ナア日向、ココツテ、マタ昔ミタイニ大破着底デキル深サカナ……？」

日向も、摩耶も、もういない。伊勢は第1射で大破していて、続く攻撃の目標にはされていなかったが既に立っているのが精一杯だった。もうまともな反撃もできないだろう。

上半身を喪失し、崩れ去った軽巡や駆逐艦も見える。蒼龍は足元に着弾して水を被って転んだせいにか、至近弾の着弾による衝撃で吹き飛ばされこそしたが、直撃はなかった。

「ドウシテ……ミンナ……！」

何故、ここまで来たのに攻撃されているのか。日本の鎮守府さえ、深海棲艦の手に落ちてしまったのか。

最早、蒼龍にそのような疑問は沸かなかった。再び自分の名すら忘れてしまった1隻の空母は、ただ、提督に会う為だけに立っている。

立ちほだかる者は全てが敵だと結論付けた。

「提督、助ケテ……」

「……君の相手は僕だ」

岸壁から照射された眩いライトが残存艦を照らし出す。いくつか、不注意な大和型がライトのすぐそばで発射した為に爆圧をまともに受け使い物にならなくなった物もあったが、それでも充分だった。

蒼龍の下に歩み出たのは1隻の駆逐艦。蒼い髪飾りの時雨改二。

何の偶然か、その髪飾りには蒼龍がいた提督のものと同じ「佐00689」が刻印されている。

「邪魔ヲ……シナイデー」

時雨から見て空母ヲ級の頭上、黄色く発光する帽子のような物体の口から艦載機が虫のように這い出し、発艦した。

光が反射する海面。そこに、時雨は蒼い髪飾りで緑の着物を着た姿を認める。

「君はまさか……!? ……いや、例え、君が何者であろうと……ここを通すわけにはいかない」

進んでも大和型の砲撃で痛みもなく消滅するだけだ。

時雨は、仮に自身の予想が当たっているのだとすれば、尚更自分の手で決着を付けるしかなかった。

多くの提督が購入することから「提督の机」と呼ばれる蒼い執務机。そこには、1つの写真立てが置かれている。

彼女の提督と、恥ずかしそうに写っているかつて秘書艦、蒼龍のツーショット——。

時雨の全砲門から、砲弾の装填音が聞こえた。背中の砲が2つに割れ、スライドし、時雨の両手に収まった。それが合図だった。

時雨の主砲の側面にあった連装砲が回転し、黒光りする砲口がまず火を噴いた。

時雨と蒼龍の最大速度はほぼ同等だ。

しかし夜戦、しかも既に至近距離と言っているいい距離。夜戦の駆逐艦相手に空母の勝ち目は低い。

「ヤマ……チ……テイ、トク……!」

蒼龍は距離を取りつつも、連装砲の砲弾を被弾した。傷は浅い。主砲で殴りかかるように迫ってきた時雨の打撃を手にしていた杖で払う。

——杖ナントテ持ツテタツケ?

無意識のうちに発艦した彗星、流星改が時雨に襲いかかる。烈風は全滅してしまっているが、夜戦であれば敵艦戦を気にする必要はない。

——夜戦デ飛バセタツケ?

そんな微かな疑問も、すぐに溶けて消えた。

薄れ行く記憶を必死に掘り返し、提督との思い出を繋ぐ。

見覚えのある風景、鎮守府正面海域。提督と海鳥に見送られ、よくここを通って出撃していた。

今はもう顔も思い出せない一航戦組が建造されても、常に変わらず第一線に置いてくれた。

「諦めてくれ……君のそんな姿、提督に見せたくない……！」

「テイ、トク……！」

名前はもう忘れてしまったが、目の前でこちらに主砲と連装砲を向ける相手と似ていた存在とよく一緒に出撃していた。

だが、その仲間はどうもない。目の前にいるのは、どれだけ似ていようとこちらを害する敵なのだから。

時雨がスライディングのように海面を滑りながら主砲を発射。

時雨は空母ヲ級の帽子のような物に着弾し、中破させたのを認めた。

同時にヲ級艦載機に向けて放った対空砲火が、その片翼を吹き飛ばす。

赤いエネルギー機銃弾を放ちながら錐揉みして落ちてきたヲ級艦載機。

しかし最後の意地とばかりに炎を吹きながら軌道修正し、慌てて回避しようとした時雨に赤い光を放つ機銃を叩きこみながら激突、残っていた爆装諸共爆発した。

「う、うわあああっ!？」

時雨の足が止まる。それを待っていたと言わんばかりに降ってきた爆弾と海面を這うように飛来した魚雷を多数受けた時雨が、薄い装甲を突き破られて撃沈していく。

「アア……ヤマグチ提督、今、ソコニ……」

遠くで大和型が自身を狙っているとも知らず、艦載機を着艦させた蒼龍は歩き出した。

足元の水面に、妖精の乗った船が浮かんでいる。背後の海面から何かの光が漏れている。それに、蒼龍は何の関心も抱かなかった。

求めているのは、提督のところへ帰りつく事だけなのだから。

「……残念だったね」

蒼龍の背中で爆発が起きた。驚き、振り向こうとする蒼龍。損傷を完全に回復した時雨はヲ級——蒼龍——の背中へ頭突きするよううにしがみ付き、背中で連結したままの主砲の安全装置をカット。

発射した。

ヲ級の帽子のような物が爆発し、燃えながら触手のような何かの一部が千切れ飛んでいく。

「昔、僕の提督は大事な人を沈めちゃったんだ。それ以来、同じ悲しみを繰り返さないよう——こうして、幸運の女神をくれたのさ」

大破したヲ級の動きが止まる。時雨にはヲ級が何を考えて動きを止めたのか、それは分からない。

しかし、時雨に背を向けたヲ級が短く「ヲ、ヲ」という声を発し、ヲ級の頬を伝って流れ落ちた水滴が全てを物語っていた。

「……さようなら、」

零距离射撃による爆発音にかき消され、時雨の最後の言葉は、声にならなかつた。

時雨はしがみ付いていたヲ級から手を離す。ヲ級は前のめりに海面へと倒れていき、水没していった。

「……これで、良かったんだ……」

沈んでいくヲ級に背を向け、時雨は力なく歩き出した。

その背後で、海中へと没したヲ級は帽子のような物の中で発艦不能となった艦載機とその弾薬に引火し、水中で大爆発を起こす。それは、奇しくもかつての彼女が辿った末路と同じ結末だった。

立ちあがった水柱で、時雨の付近だけ雨が降り注ぐ。

「……雨は、いつか止むさ。もし僕がそっちに逝くようなことがあったら……また、会えるといいね」

——今度、提督と一緒に花を手向けに来よう。これまでに散っていった艦娘達が安らかに眠れるように……

「提督、終わったよ。何もかも……」

『そうか……お疲れ様、時雨』

時雨は三つ編みにしがみ付いていた通信妖精に、会敵から今まで電源を切らせていた通信機を再起動させ、空を見上げた。

土砂降りの雨は止み、いつかと同じように、満月が波打つ海面を優しく照らしている。

例え、今の空母ヲ級が彼女だったとしても、あの優しい提督がそれ

を知ることはないだろう。

それでいい、と時雨は思った。

*

翌日、横須賀鎮守府が八丈島近海にて横須賀方面及び本州沿いに北へと侵攻していた深海棲艦の大規模艦隊を殲滅したことを発表。

同時刻、呉鎮守府も高知県沖の島近海にて敵艦隊を殲滅完了と発表した。

同様に佐世保鎮守府も敵艦隊の殲滅完了を発表し、海軍司令部は日本本土に対する深海棲艦の大規模攻勢が終息したことを宣言したのだった。

この海戦において、最も多くの深海棲艦を相手取ることとなった横須賀鎮守府。

横須賀からは大和型だけでも数千人が出撃しており、万単位の艦艇による一斉砲撃で敵艦隊は一瞬で消滅したものの、この砲撃を原因とする大地震が発生。

横須賀鎮守府はしばらくの間物資不足と地震からの復旧作業に追われ、皮肉にも深海棲艦以上に味方の艦娘から大きな被害を受ける結果となってしまったのだった。

エピローグAルート 暁の水平線を越えて

*

“Aルート：暁の水平線を越えて”

*

——気がつくト私モ深海棲艦ニなつてイタ

——デモ、それデモ私ハ、提督ノトコロヘ帰りタイ……

——ダガ提督ハ、私ガコノ姿ニなつてモ、かつテ貴方ニ愛シテモラツタ私ダト、分カツテクレルノダロウカ……？

——横須賀沖 海底に沈む戦艦ル級だった残骸の記憶の残滓

*

深海棲艦の夜襲が終わつて、提督の下へ戻つても時雨は結局あの空母ヲ級のことを報告することはなかった。

だが、それでいいのだ。蒼龍を失つた悲しみの分、深く時雨に依存するようになった提督を失うことなど、時雨には到底考えられなかった。

あの夏の鎮守府で蒼龍が失われてから、その悲しみを埋めるように代わりに始まった彼女と提督との関係は、互いが互いに依存する共存状態へと陥っていた。

一般的にはあまり、いいことではないのかもしれない。明らかに時雨は蒼龍の代わりとして愛されているのだろう。だが、それが一体どうしたというのか。

深夜の執務室、目の前で自分に対して愛情を注ごうと動いている提督の頭を撫で、自ら動きながら更に求め合う。

代わりだろうがなんだろうが、自分が慕う提督に愛されて、悪い気など全くしない。 当人同士が幸せなのだから問題なんて存在しない。

でも、提督から愛されるたびに時雨は思うのだ。

——あの南方作戦の終盤、自分は故意に蒼龍を助けなかった——？
そんなことはない、とは時雨自身わかっている。 だが、結果的に蒼龍がいなくなって自分が愛されるようになった今。 時雨は拭い

きれない罪悪感と、こんなことを考えてしまう自分に嫌悪感を抱いてしまう。

——僕が沈んでいたら、こんなこと考えずに済んだのかな、と。

そんな思考も、直後に訪れたとてつもない快感と、提督から注ぎ込まれたたくさんの愛情に、押し流されてしまっただけだった。

*

「困ったのですー」

「困ったねー」

「困ったのー」

深海棲艦による大規模攻勢の翌朝、佐世保鎮守府地下、工廠内部。そこでは数人のゆるい雰囲気、工廠妖精が集まってうんうん唸っていた。

妖精達は、昨夜この秘書艦である時雨から「提督がずっと五航戦をお迎えできないでいるから五航戦をなんとか作れないか」と、そう言われて資材を渡されていた。

「資材が足りないのですー……」

妖精達の記憶では五航戦どころか今は二航戦すらいかなかったような気がするが、それは置いておく。

とにかく、その貰った資材なのだが鋼材とボーキサイトの量が明らかに足りなかった。こういうのは普通提督が指示する物なのだ。時雨はどう配分すべきなのか知らなかった。

このままでは何かの間違いで艦隊のアイドルができかねない。

「班長ー、どこかから資材調達してきますー」

「泥棒は駄目だよー」

「大丈夫ですー。ちよつと沖の沈没船から取ってくるだけなので。女神さんの船を借りますねー」

「あ、ちよつとー！」

工廠を飛び出していった工廠妖精は静止も聞かずにその姿が見えなくなった。

工廠妖精班長からの静止の声は、間に合わなかった。

「そういえば、空母の建造って久しぶりですねー」

「だねー」

マイペースな妖精たちは追いかけるようなこともせず、今やることが何もない工廠妖精たちは時雨の面子を守る為に、資材が足りないという報告を握り潰して飛び出していった妖精のことを待つべく、一旦頭の隅へと追いやった。

結局、その妖精が戻ってきたのは4時間後のことだった。応急女神の船ではなく、海上で有り合わせで造ってきた大きな船を零式水上偵察機数機がかりで浮かべて帰ってきた。

船の中には大きな木箱。もう動かない空母ヲ級が入っていた。

「沖に沈没した深海棲艦ヲ級の残骸があったので取ってきましたー」
「危ないですー。深海棲艦は触っちゃダメだって聞いたことないのですかー」

「でもこれがないと資材足りないし、提督のところに行ったら時雨さんが怒られちゃうのですー」

「もーいいや、これ使って作っちゃえー」

妖精たちは気が付いていなかったが、空母ヲ級にはまだ息があった。頭に被っていた帽子のようなものが外れたおかげで、瀕死ではあるものの一命は取り留めていたのだ。

——モウ一度、提督二会イタイ……

しかし、妖精にすら抵抗できないほど弱っていたヲ級はその場で資材へとバラバラに解体され、呆気なくその生涯を終えた。

お気楽な工廠妖精たちは深海棲艦の残骸から回収した資材を放りこみ、それで建造を開始したのだ。

まさかその新鮮な資材にその深海棲艦の最期の残留思念が残っていると気付かずに。

資材回収で遅れた時間を取り戻すように、工廠妖精が持つ不思議なバーナーで汚れを浄化しながら建造時間を短縮する。

艦の魂を持つ少女が建造ドッグと呼ばれる装置の中で急速に形成されていく。

すぐに、艦娘が出来上がった。

「あれー、空母だけど五航戦じゃないのですー。これは確か……」

「とりあえず提督と時雨さん呼んで来てくださいー」

*

「全く、資材を勝手に使っちゃダメだと言わなかったか？」

「あ、あはは……ちよつと、提督を驚かせたくてね」

執務室の正面にあるエレベーターから、提督と時雨、時雨の頭の上で寝そべる工廠妖精が地下へと降りていく。

時雨はやってきた工廠妖精から建造結果を聞き、胸を抉り返されるような痛みと共に奇妙な運命を感じていた。流石に深海棲艦の残骸を使ったと聞かされた時は、普段冷静な彼女も狼狽したが。

「大丈夫。……きつと、提督に損はさせないから」

辿りついたドックは4つのうち2つが未整備で使用できなかったが、元々建造することが少ないこの提督はそれで満足していた。

新しい艦娘を手に入れるには建造か司令部からの支給のどちらかしかないが、大多数の提督は手に入れた艦娘を大切に扱うので艦娘が不足するということはそうないのだ。

「それで、結局何ができたんだ？」

「妖精さん、お願い」

「はい」

「初めまして、航空母艦——」

妖精が、奥の部屋から艀装を済ませた艦娘を連れてきた時、提督と連れてこられた艦娘双方の目が点になった。それほどまでの衝撃が、見つめる両者の間を駆け巡った。

「まさか、本当に……秘書艦時雨はしばらく看板かな？」

時雨は、その奇妙な沈黙の間で何かを悟り、エレベーターへと帰っていく。

こんな話は今まで聞いたことがない。しかし、深海棲艦とは謎に包まれた存在なのだ。奇跡の1つや2つ、隠れていても不思議ではないのだろう。

「……でも、僕、本当は提督の一番になりたかった……っ！」

時雨は執務室に向かうエレベーターを出ながら声を殺して静かに泣き、執務室で思う存分涙を流した。

時雨が去った後も、しばらく両者は見つめ合ったままだった。やがて、意を決したのか新造艦娘から口を開く。

蒼い髪飾りに「佐00689」。同一艦であれど、新たな別個体が建造されるのが普通だ。

しかし、今回は空母ヲ級の残骸から空母を作るといってもないことが起きていて、しかも誰も知る由もないが、そのヲ級は深海棲艦化する前、同じ提督の下に所属していた。

どう考えても普通ではなかった。

「航空母艦、蒼龍です。そして……ただいま、提督？」

「……おかえり、蒼龍」

2つの影が、重なる。くしゃくしゃの顔になった佐00689提督が、同じく涙を流す蒼龍へと抱きついた。

蒼龍は——かつて南の海に沈み、提督のところへ帰ることだけを目指して戦った彼女は、深海棲艦としての記憶を何もかも忘れ去りながらも、ただ1つ最期の瞬間まで忘れることのなかった存在^{ていとく}と、1つの奇跡を生んだ。

*

この戦いがいつまで続くのは分からない。だけど、帰ってきた彼女とならどこまでもやれる気がした。

かつて受け取れなかった、左手薬指に光る結婚指輪を陽光に煌めかせ、ハチマキも締めた彼女は、蒼龍改二と呼ばれる存在へと至った。

「……行こうか、蒼龍」

すぐ隣に、護衛の時雨が立つ。

その手にはやはり指輪があるが、これは自身が提督から指輪を受け取った後、遠慮する時雨に提督^{不在中の情事}の弱みを握った彼女が提督から新たにプレゼントさせたものだ。

彼女が帰ってきた日から、提督のベッドは蒼龍と時雨と提督で寝ることになった。そういうことになったのだ。

失った時を取り戻すかのように、彼女は碧衣着物を潮風に翻らせ、暁の水平線を越えて今日も行く。

出撃先は、ミッドウエー。かつて彼女が沈んだ海。だが、提督

と一緒になら間違はなく帰ってこれるだろう。
「第一艦隊旗艦、蒼龍！ 出撃します！」

“Aルート 暁の水平線を越えて” おしまい

エピソードBルート 沈む鎮守府

*

“Bルート：沈む鎮守府”

*

——漂うマリンスノーは、私たちの心の影を和らげる

——この海の底に漂ってしよう

——いつまでも、どこまでも……

*

「困ったのですー」

「困ったねー」

「困ったのー」

深海棲艦による大規模攻勢の翌朝、佐世保鎮守府地下、工廠内部。そこでは数人のゆるい雰囲気 of 工廠妖精が集まってうんうん唸っていた。

妖精達は、昨夜この秘書艦である時雨から「提督がずっと五航戦をお迎えできないでいるから五航戦をなんとか作れないか」そう言われて資材を渡された。

妖精達の記憶では五航戦どころか今は二航戦すらいなかったような気がするが、それは置いておく。

とにかく、その貰った資材なのだが鋼材とボーキサイトの量が明らかに足りなかった。こういうのは普通提督が指示する物なのだ。

時雨はどう配分するべきなのか知らなかった。

このままでは何かの間違いで夜戦バカができかねない。

「班長ー、どこかから資材調達してきますー」

「泥棒は駄目だよー」

「大丈夫ですー。ちよつと沖の沈没船から取ってくるだけなので。女神さんの船を借りますねー」

「こら、止まるのですー！ 泥棒は駄目だって言ったばかりですよー！」

「え……でも、それじゃ時雨さんが怒られるのです」

しよぼん、としてしまった工廠妖精へ眉をハの字にした班長がやや

困ったように告げる。この飛び出そうとした工廠妖精も、善意でわざわざ探しに行こうとしたのだ。しかし、それは班長には認められない行為だった。

「後で計算が合わないって言われて怒られるのは私なのです。だから、今のうちにこっそり提督に謝って資材を貰ってくるのです」

「う……時雨さん、怒られない？」

「怒らないように言ってみるですよ」

飛び出そうとした工廠妖精はしばらく逡巡した後、ようやく頷いた。

班長が帰ってきたのは30分後。足りなかった分の資材を手の空いていた妖精で運び込み、建造を始める。特に急ぐわけでもないので、バーナーは使わなかった。

「あれー、空母だけど五航戦じゃないのですー。これは確か……」
「とりあえず提督と時雨さん呼んできてくださいー」

艦娘が完成し、提督が秘書艦時雨と共に工廠を訪れたのは夕方前のことであつた。

*

「時雨、こっそり資材を持っていくのはやめてくれ。誰かがつまみ食いしたのかと思つてた」

「あ、あはは……。ちよつと、提督を驚かせたくてね」

執務室正面のエレベーターから、提督と時雨、時雨の頭の上で寝そべる工廠妖精が地下工廠へと降りていく。時雨の頭上にいるのは先程海に飛び出そうとした妖精だ。

何ができたのかは、時雨も知らない。でも、空母艦娘らしいとは聞いて、胸の奥が抉り返されるような痛みを感じた。

「それで、何ができたんだ？」

「妖精さん、お願い」

「はい」

工廠妖精が奥の部屋から艤装を済ませた艦娘を連れてきた瞬間、提督の目が見開かれた。しかし艦娘側にそのような変化はなく。

「――蒼龍？」

「はい、初めまして。 航空母艦蒼龍です」

「……ああ、よろしく頼む」

たった一言交わしただけで分かった。 分かって、しまった。

沈んだ艦が戻ってくるなどという都合の良い奇跡など存在しないのだと。 かつて喪ったあの少女とは、見た目が同じだけで違う存在なのだ。

それ以降、正規空母蒼龍が彼の艦隊で積極的に登用されることはなかった。

期待しただけに失意も大きい佐00689提督は俯いたまま、エレベーターを昇っていく。

時雨は、どこかほつとしながら——しかし何故か溢れる涙は止まらないまま、告げた。 もうそろそろ、区切りをつけてもらおうべく。

「ねえ、提督……。 ……花を手向けたんだ、蒼龍に……」

ぼんやりしていた提督も、エレベーターが上に到着する頃になって、やっと返事をした。

「ああ……行こうか……」

*

その日の夕方。

前日の夜に大爆発を起こし、水没した佐世保帰還艦隊の蒼龍は、水中でかろうじて生きていた。

無意識のうちに前日に散っていった大勢の戦友たちの残骸を食らい、燃料と鋼材血と肉を得て傷を癒した蒼龍は、損傷した片目から青い焰を立ち上らせながら、ゆつくりと水底を歩いて岸へと進む。

いつのまにか頭の上にくっついていた格納庫を失い、代わりに自身の名を忘れても頭の中にただ1つだけ残っていたのは、提督との再会を求める感情。

金色のオーラを纏う空母ヲ級から空母ヲ級改へと進化した彼女は、共に帰ってきた戦友を皆殺しにした艦娘と人類への憎しみを提督に会いたい一心で塗りつぶして、超えてはいけない一線に足をかけたまま進む。

——テイトクナラ、テイトクナラ、私ノコト、分カルヨネ……？

やがて水底は岸へとぶつかり、蒼龍は水面を見上げる。何か水面に落ちてきたが、もうそれが何か判別はできない。愛する提督以外もう目に入らない。

蒼龍は水上を一切気にすることなく、水面に投げ落とされた花束を波でひっくり返しながら浮上した。

「——っ!？」

「え……っ!?! 空母ヲ級……!?! 生き残りがいたの……!?!」

蒼龍には、わかった。かつてよりだいぶやつれてはしまったが、それが自身のテイトクだと。

その存在の隣には、昨日自分を沈めた存在がいるのだが、もう提督しか目に入らない蒼龍には何の関係もなかった。

「アア、テイトク、ダ。ゴメンナサイ、待タセテ……帰ッテキマシタヨ、テイトク」

佐00689の山口提督が、何故か静かに泣いている時雨の提案で花束を手向けにきた、海鳥が舞う夕焼けの岸壁。

そこに胸から上を水面から出して現れたのは、頭の艦載機を吐き出す帽子のような存在がいない空母ヲ級——しかも青い焰を片目から漏らしている、新種——だった。

もちろん、〃ヲヲヲ〃としか言わないヲ級と言葉は通じていない。だが波が消え、夕日で反射する水面を見た山口提督の口から、自身思ってもいないような名前が滑り落ちた。

艀装のない時雨はどこか諦めたかのように眩く。

「——蒼龍?」

「……そうか。来ちやつたんだね……」

蒼龍^{ヲ級改}は嬉しそうに微笑みながら、頷いた。そして、自分の髪に付いたままだった最早元がなんだったのかも判別がつかない残骸を差し出した。

「ああ、ああ……!?!」

文字が薄れて読みにくくなった蒼い髪飾り。〃佐00689〃の文字を認めた彼は、顔をくしゃくしゃにしながら人類の敵にして怪物の深海棲艦、微笑む空母ヲ級改へと抱きついた。

——その直後。飛来した零戦の機銃掃射が2人を襲い、背中から何十発もの機銃弾を一齐に受けた。佐00689。提督は、自身に何が起きたのかも気付かないまま幸せの絶頂のうちに、蒼龍の腕の中で事切れた。

「え……っ？」

「提督……？」

「……おかしいと思つてたのだ。連中は何故、ここへ一直線にやつてきたのか……！」　　佐00689、貴様がソイツと手を組んでいたのだな！」

「新種の深海棲艦……？　珍しい、ちよつとバラバラに解剖させてくれないか？」

蒼龍^{ヲ級改}と時雨が絶句する中、怒りの声と共に現れたのは、不知火と加賀を引き連れた佐世保の特別警察隊。

人類と、生物と鋼鉄の船を食らう海からやってきた怪物、深海棲艦。そんな両者が手を取り合うことなどあり得ないと3人が叶えかけた希望を銃弾で打ち砕いた特別警察隊。

彼らの判断は常識的な判断ではあった。少なくとも、人類の間においては。

「そのヲ級も捕まえて拷問だ！　とにかく拷問せよ！」

「拷問と解剖を兼ねればいいだろう？」

蒼龍は涙を流しながら、腕の中の提督を抱きしめたまま、水中へと去っていく。

後に残されたのは、溢れる涙を抑えられない時雨と、対潜攻撃を行う特別警察隊だけであった。

*

その後、佐世保鎮守府の超至近距離まで空母ヲ級に接近されたという事実は隠蔽された。

提督不在の「佐00689」艦隊には、今度新しい提督が赴任するのだという。提督が1人交代したところで全体に何の影響もない。

そして、あの場に居合わせた時雨も。書類上行方不明扱いにされた彼女は、人知れず自沈処理されることとなる。

元より時雨は、別の新しい提督の下につく気などなかった。

愛する提督という名の希望を失い、もうどうでもよくなってしまう彼女、提督と自身の命を奪っていく人類に、隠しようのない失望を募らせながら、彼女は浪間へと消えた。

*

どこかの海域の、どこかの海底。

そこで海流に揺られながら、2人の深海棲艦がボロボロになった提督の遺体のそばに寄り添っている。

2人は提督を抱きしめながら、水面を見上げた。

自分たちと同じ、自らの提督を探し求める元艦娘たちが、大艦隊となつて日本を目指していく。

なんでもアリューション列島とミッドウエー島に主力が出払つたこの隙に提督の下へ帰ろうという魂胆らしい。

そして、帰り着いてやっと気づくのだ。自分たちが帰る場所など、もうどこにもないことを。

——だが、ヲ級改とイ級後期型の2人にはもうどうでもいいことだった。

2人の人類に対する憎悪と怨念から新しい深海棲艦たちが生まれていくが、彼女たちに視線を向けることなどありはしない。

新しく生まれた彼女たちには、求める提督などいない。ただ嘆きと怨念で構成された、哀れな存在。

だが2人の愛する人は、この腕の中にいる。満たされた彼女たちは、もうどこへも離れていくことはない——。

*

海流に流されるまま漂っていた2人は、後に深海棲艦の間で人類には決して手を出せない“深海中枢鎮守府”と呼ばれるようになる場所を造りあげた。

2人の姫で1人となった中枢棲姫の腕の中で、この環境下で魂を宿らせたボロボロの制服を纏うかつて提督と呼ばれた存在が深海棲艦と迷い艦娘を指揮する。

人類と艦娘、それに対抗する深海棲艦の戦いは終わることなど無

い。

今日もここで、新しい深海棲艦が生まれ、育ち、巣立っていく。
蒼龍中と時雨棲は、最早お互いと提督以外何も見ず、聞かず、感じない。
だから、今も見え、聞こえている愛しの提督が幻だと、幻聴だと気
付くことはない。

これからも3人は幸せに寄り添っていく。 ずっと、ずっと、ずつ
と――。

“Bルート：沈む鎮守府” おしまい